

# 3.11

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い2

俺たちが地域を守り復興を果たす

平成十三年度  
卒業制作

ニモマケズ  
モマケズ



# 3.11

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い②

俺たちが地域を守り復興を果たす



初めて経験する課題と悩みが、

被災地にはある。

膨大な復旧・復興事業に、

地域建設業として様々な工夫をこらし、

必死で対応しているが、

東日本大震災で失ったものが、

あまりにも大きすぎる。

だが、どんなことがあっても、

やらなければならない。

俺たちが地域を守り、

そして、一日も早い復興を果たしていく。

現場技術者の闘いは、今も続いている。

東日本大震災より早いもので3年が経過いたしました。宮城県震災復興計画においては復旧期から再生期へ移行して参るところであります。

この大震災における巨大地震及び大津波によって、犠牲になられた方や被災さ

られておりませんが、震度5弱以上の地震が発生すれば、夜中や休みも関係なく、当協会会員企業はそれぞれの担当区間を2時間以内にパトロール点検し、被災箇所を報告する災害協定を締結しているなど、復旧・復興事業と並行しながら取り

# 東日本大震災を風化させることなく、地域の安全・安心を確保する「町医者」として必要な危機管理産業であることを広報し続ける

ごあいさつ

一般社団法人 宮城県建設業協会  
会長 佐藤 博俊



れた方、今なお避難生活や仮設住宅での生活を余儀なくされている多くの方々に、あらためて心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

我々地域建設業者は、自ら被災しながらも、通信手段が途絶、電気・水道・ガスなどのライフラインが長期間遮断し、橋の落橋、道路がいたるところで寸断され孤立集落が点在する過酷な環境下において、道路啓開から応急対応、住民の安全避難、仮埋葬から水産加工物の海洋投棄など、今まで経験をしたことのない様々な震災対応を行い、現在も、膨大な復旧・復興事業の担い手として、建設産業界が英知を結集し総力を挙げ、フル生産・フル稼働で愛する宮城の早期復興に向け取り組んでいるところであります。

一方で、地域建設業は地域の安全・安心を確保する「町医者」として、住民のニーズに応えるべく、人員及び資機材を有する強みから、様々な地域と密着した活動を展開しており、一般にはなかなか知

組んでおります。

このたび、東日本大震災から3年の節目にあたり、地域建設業の現状、活動を正しく世間一般に伝えるために、第2弾の記録誌を発刊いたしました。

この東日本大震災を風化させることなく、また、地域建設業が果たしている役割、今後も地域の安全・安心を確保する「町医者」として必要な危機管理産業であることを広報し続けるため、宮城県の復興を遂げるまで定期的に地域建設業の関心に関する記録誌を発刊して参りたいと考えております。

最後になりますが、大震災直後より、これまで全国建設業協会をはじめ、各都道府県建設業協会及び関係団体等の皆様方には物心ともにご支援・お励ましを賜り、衷心より御礼を申し上げますとともに、記録誌の作成にあたり今回もご協力を頂きました日刊建設工業新聞社をはじめ関係各位に対しまして厚く感謝を申し上げます、ごあいさつといたします。



## 東日本大震災における宮城県建設業協会の対応

宮城県建設業協会は、震災後直ちに協会本部(仙台市)に災害対策本部を設置。国や自治体、住民の要請を受け、組織としてがれきを撤去し、道路を確保するなどして、消防や自衛隊、警察、マスコミが、津波被害を受けて孤立した地域に入れる状況にした。

県内9支部のうち沿岸部には5支部があり、津波被害を受けた沿岸3支部には連絡が付かなかった。だが、会員企業は自ら被災しながらも、誰よりも早く被災現場に駆けつけ、道路啓開を開始していた。「地域を守る」という使命感から、協会の総力を挙げて、燃料や食料・衣服の提供、さらには遺体の仮埋葬や腐敗した水産加工物の処理まで、あらゆる要請に応えた。

## 目次

ごあいさつ	一般社団法人 宮城県建設業協会会長 佐藤 博俊	4
	東日本大震災における宮城県建設業協会の対応	5
<b>1</b>	<b>被災地は今</b>	9
<b>2</b>	<b>現場技術者の闘い 俺たちが地域を守り復興を果たす</b>	
沿岸部1	佐藤 栄人 山内組(石巻市)	26
	武山 智恵子 若生工業(石巻市)	30
	奥田 貴則 木村土建(東松島市)	34
沿岸部2	小野寺 孝 小野良組(気仙沼市)	40
	小山 堅 坂口組(気仙沼市)	44
	藤谷 廣司 阿部藤建設(南三陸町)	48
内陸	青沼 裕一郎 丸か建設(加美町)	54
	只野 英博 只野建設(登米市)	58
県南	日下 実 春山建設(岩沼市)	62
	春日部 泰昭 春日部組(丸森町)	66
仙台市	渡邊 秀悦 皆成建設(仙台市)	70
	澤瀬 俊矢 阿部和工務店①(仙台市)	74
	石川 祥和 阿部和工務店②(仙台市)	76
	佐々木 光也 橋本店(仙台市)	80
	着実に進む復興 現場技術者の努力で	84
<b>3</b>	<b>特別座談会 東日本大震災の発生からこれまで</b>	89
	～多くの悩みを抱えた被災地の現実	
<b>4</b>	<b>資料編</b>	
	宮城県の子算額と公共土木施設の復旧状況	104
	災害に強いまちづくり宮城モデルの構築の推進	106
	災害廃棄物の処理状況	108
	災害公営住宅の整備状況	109



# M9.0

高さ  
**18.4m**

## 東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分

震源は三陸沖(牡鹿半島の東南東130km付近)

マグニチュード9.0(宮城県北部で最大震度7)

津波浸水高は最大18.4m(女川町)

宮城県内の浸水面積は327km<sup>2</sup>



# 被災地は今



# ツール・ド・東北 2013



## 自らの目で 「被災地の今」を

甚大な津波被害を受けた  
宮城県沿岸部の  
石巻市、南三陸町、女川町を自転車で走る  
「ツール・ド・東北2013」が  
2013年11月3日に開かれた。  
全国から参加した約1,300人は、  
自らの目で「被災地の今」を確認し、  
復興への願いをペダルに託した。



(撮影 水本圭亮)

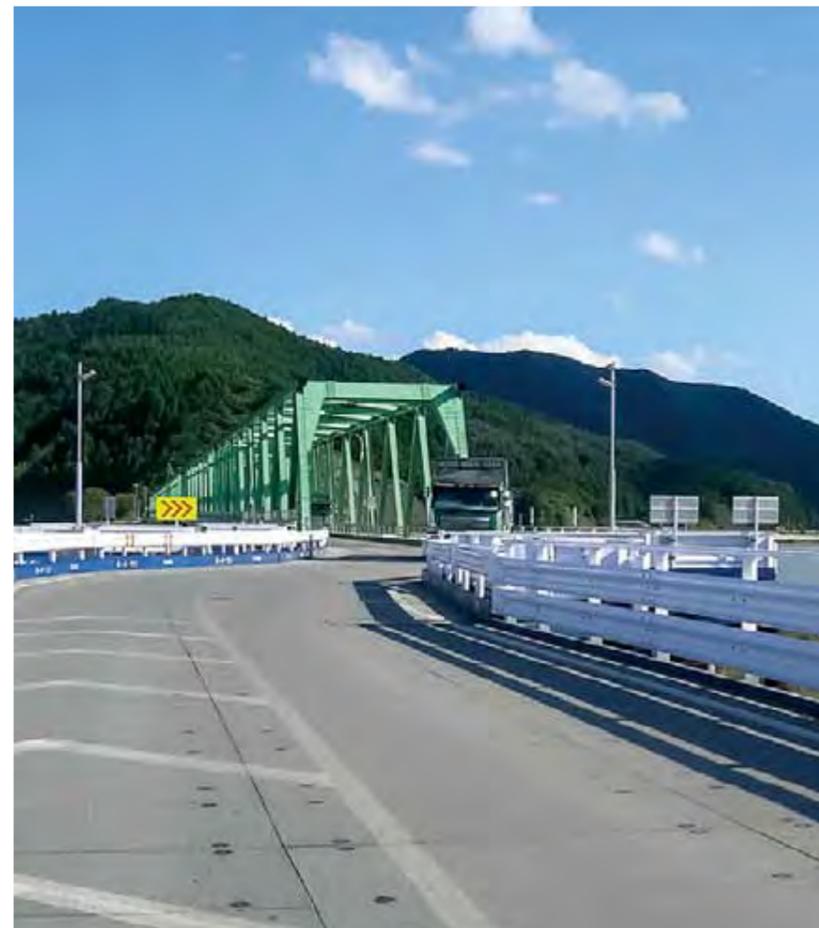


写真上・下：被災地にはたくさんのトラックが。参加者と併走する場面も(2013年11月)。

# 新北上大橋を 対岸へ

ツール・ド・東北の参加者は体力に合わせ、三つのコースでゴールを目指した。多くの児童が犠牲になった石巻市立大川小学校近くの交差点。参加者の多くが、ここから新北上大橋を渡り、対岸を南三陸町に向かって北上。再び、新北上大橋を渡り、ゴールの石巻専修大学を目指した。

再び新北上大橋を渡り、ゴールを目指す参加者(2013年11月)。



写真上・下：復旧して通行可能になった新北上大橋(2011年10月)。

## 津波で流出、 会員企業が復旧

新北上大橋は、津波で左岸側の2径間、約150メートルの桁が流された。国道398号が不通となり、迂回するのが大変だったが、宮城県建設業協会の会員企業である遠藤興業（石巻市）の努力で工期を短縮。2011年10月には通行できるようになった。



花を手向けたり、手を合わせたりする人が、今も絶えない(2013年11月)。撮影 上、下、右とも水本圭亮。

## 大川小学校には…

新北上大橋の右岸側のたもとは、  
石巻市立大川小学校の建物が残されている。  
ツール・ド・東北は順位を競う大会ではない。

中には自転車を止めて  
廃虚となった建物に見入る参加者も。

大川小学校には、  
今も花を手向けたり、  
手を合わせたりする人が絶えない。



ペダルをこぐ足を止めて、大川小学校に見入る参加者(2013年11月)。



大川小学校の校庭に残る卒業制作。(2013年11月)。



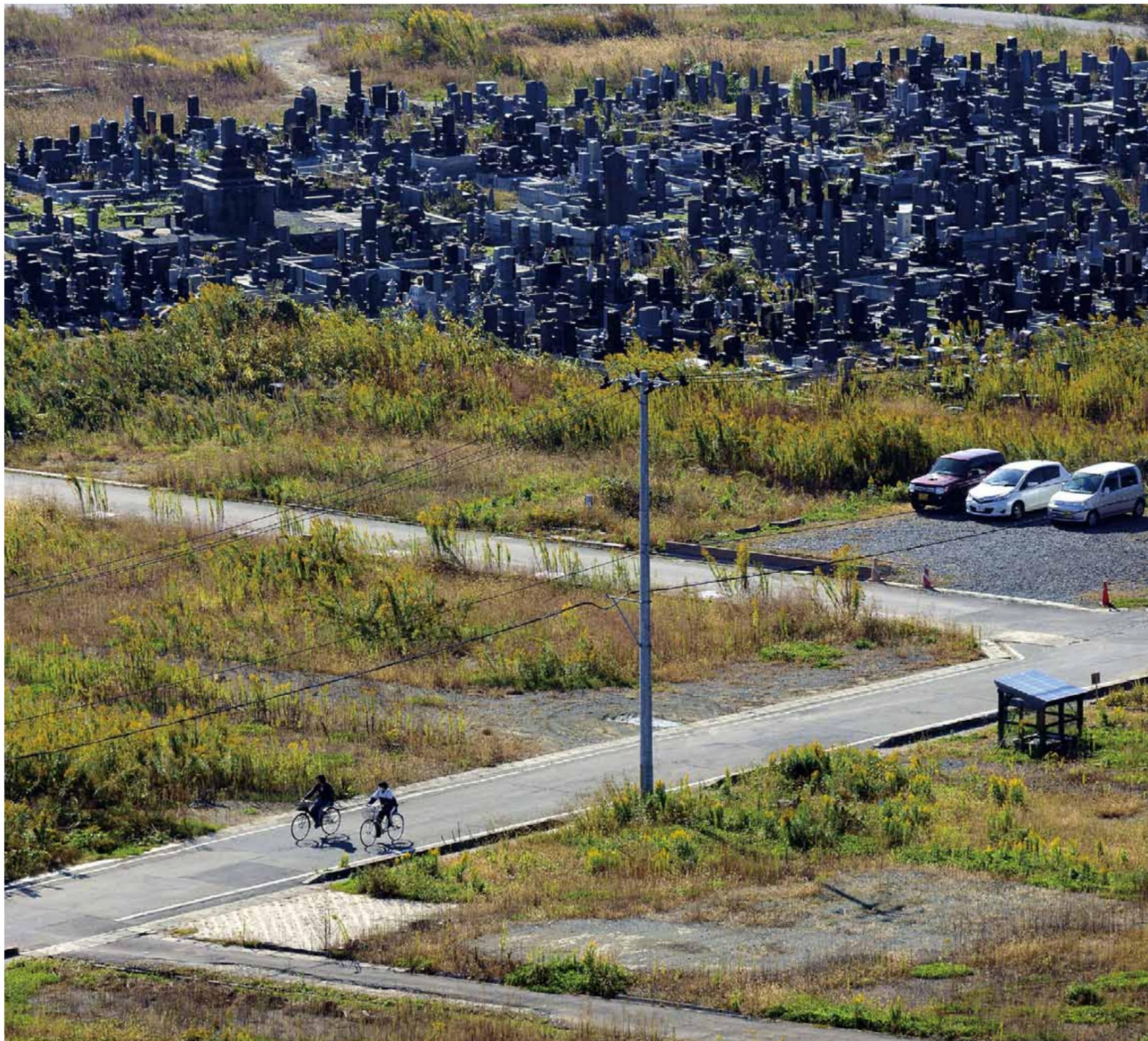
煙を吐き出す日本製紙の石巻工場(2013年11月)。撮影 左、右とも水本圭亮

# 被災地の復興

震災から時間が経過し、被災地は落ち着きを取り戻しつつある。大きな津波被害を受けた石ノ森萬画館(石巻市)も営業を再開。日本製紙の石巻工場(同)からもモクモクと煙が上がるようになった。

日和山から見下ろす石巻の市街地。円盤のような建物が石ノ森萬画館(2013年11月)。





石巻市内でも、ちょっと目を転じると復興がこれからの地域も。たくさんの真新しいお墓が並んでいる (2013年11月)。撮影 水本圭亮



南三陸町の防災対策庁舎の周辺も、復興はこれからだ (2013年11月)。

## 復興をはばむ 難しい現実

被災地は  
徐々に笑顔や活気を取り戻しつつある。  
だが、地域によっては、  
復興計画の策定の遅れや  
土地収用の問題などから  
復興がこれからのところも。  
「ふるさとを取り戻したい」という思いで  
多くの人が努力しているが、  
被災地の難しい現実がある。



仙台湾南部海岸(岩沼市)では、海岸堤防の復旧工事が続いている(2013年6月)。



東松島市での復興まちづくりに向けて、延長約1.2キロのベルトコンベアで土を運んでいる(2014年2月)。



仙台湾南部海岸(岩沼市)での作業状況(2013年3月)。



南三陸町の防波堤工事(2013年12月)。

### 現場技術者の闘いは今も

被災地では、  
 通常では考えられない数の建設現場が動いている。  
 少しでも早く、  
 安心して住める状況を整備したいというのは、  
 地域共通の願いだ。  
 地域建設会社もできる限りの努力をしているが、  
 今回の震災では失ったものがあまりにも大きすぎる。  
 現場技術者の闘いは今も続いている。

北上川の築堤工事。応急復旧してあった堤防の地盤を改良し、大きな津波がきても耐えられるようにする(2013年12月)。



南三陸町の海に近い建設現場。いたるところで建機が稼働している(2013年11月)。



雪が降っても、現場技術者の闘いは続く(2014年2月)。



三陸自動車道の4車線化工事(2013年12月)。

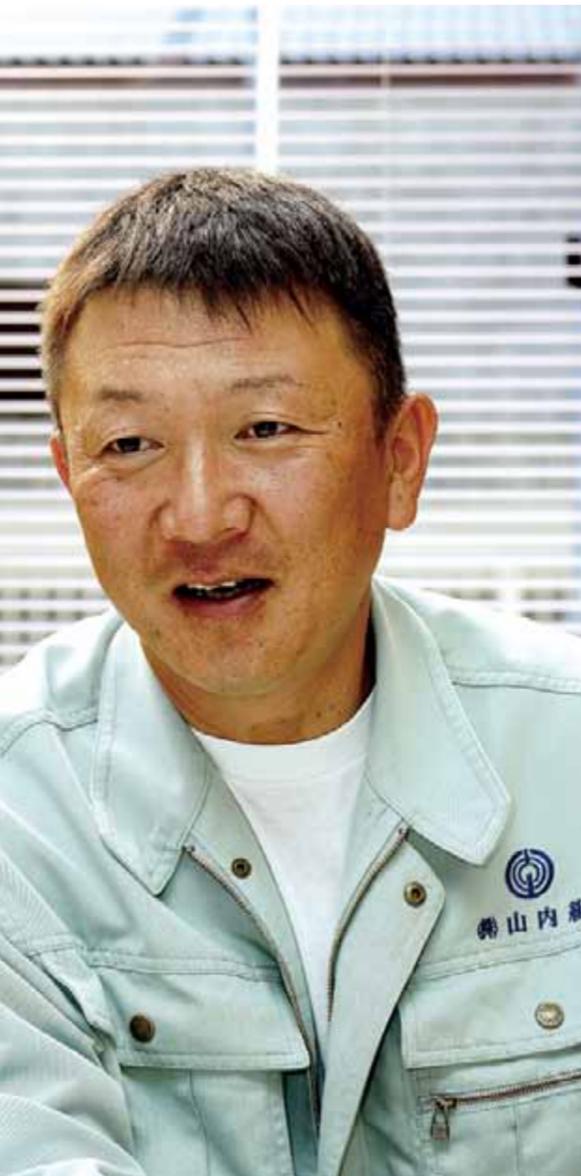
# 俺たちが 地域を守り 復興を 果たす



## 沿岸部1 (石巻支部、塩釜支部)

- 佐藤 栄人 山内組 石巻市
- 武山 智恵子 若生工業 石巻市
- 奥田 貴則 木村土建 東松島市

大きな津波被害を受けたものの、  
市街地は活気を取り戻し、  
漁港でも水産物の加工場や  
冷凍庫の再建が進みつつある。  
だが、海沿いに目を移せば、  
がれきが片付き、  
本格的なまちづくりが始まったばかりだ。



山内組取締役課長。1996年に入社。主に道路改良や下水道、河川などの宮城県発注工事を担当してきた。土木部の課長として7人の部下を束ねる。

バックホウなどの重機を使って、2階や1階の屋根から住民を救出した。

用途外使用なので、重機に人を乗せることなどあり得ない。

何十人も取り残されていたので、とにかく使える重機を使って救出した。

山内組(石巻市) **佐藤 栄人** 氏

石巻市の北上川下流で地震に遭遇。地域の消防団に所属。

人々を助けなければならない立場に。がれきと一緒に流れてきた人を助け、車で会社の仮設ハウスへ連れて行き、ストーブにあたってもらった。

..... **311 2:46**

## 救助

会社で道路の維持管理業務を受託していることから、震災後に道路パトロールに出た。地震でできた段差に注意を呼びかける標識やカラーコーンを置きに行った。自宅の近くにも行ったので、大きな声で「逃げろ」と声を掛け、家族を避難させた。

しばらくすると、津波が堤防を越えてきた。夢中で逃げた。会社に戻ると女性事務員が2人いたので、すぐに避難させた。男性社員はすべて地震発生後に現場に出た。後に津波がきて、会社は1.7メートル浸水した。だれもいなかったが、自動ドアが開いたためにドーンと建物内に水が入ってきた。

北上川から南側は全壊した。会社のある橋浦地区の住民は高齢者も多い。逃げられる人は橋浦小学校に避難したが、多くの人を取り残された。地区全体が水浸しになったままで、身動きが取れなかった。翌日、バックホウなどの重機を使って、2階や1階の屋根から住民を救出した。用途外使用なので、通常であれば、重機に人を乗せることなどあり得ない。何十人も取り残されていたので、とにかく使える重機を使って救出した。

遺体捜索も行ったが、亡くなった方に顔見知りも

## 行方不明

私と同じ現場で仕事をしていた38歳(当時)の同僚が、津波で行方不明になった。地震発生後に、車を飛ばして出て行った姿を覚えている。家族を逃がし、水門を閉めに行き、そのまま行方不明になったようだ。

名前は佐藤一栄。私より一つ年下のいこだ。母親同士が姉妹で、小さいころからいつも一緒だった。釣りやサーフィン、スノーボードもした。一緒に酒も飲み歩いた。良いことも悪いことも含め、数えきれない思い出がある。今思えば、なぜ、あんなに一緒にいたのだろう。

2人で担当していたのは、石巻市大川地区の



社内旅行でのスナック。佐藤一栄氏(右)は2001年4月に山内組に入社。技術者として、津波被害を受けた大川地区や釜谷地区で区画整理や堤防工事を担当していた。



使える重機を使って住民を救出した(2011年3月12日)。写真の老夫婦は住居を直し、今も橋浦地区に住んでいるという。

いたのが一番つらかった。私も橋浦地区に住んでいたのだが、多くの住民が津波に飲まれ、別の地区に流れ着いていた。私は7人くらいの遺体を見つけた。遺体に袋を被せておき、生きていた人の救助を優先した。90歳代のおばあさんをおぶって、約2キロを歩いてきたこともある。自衛隊が救助にくる前だった。

排水機場の基礎工事だ。いところが現場代理人だったが、たまたま前年度に私が担当した現場と同様の地盤改良工法が採用されていたため、社長に「今回の現場は2人で管理しろ」と言われていた。

現場では、最初の測量から施工管理までを一緒にやった。3月11日は朝からコンクリートの打設作業を行い、いつも通りに午前10時の休憩では世間話で盛り上がり、昼飯も一緒に食べた。その日のうちに「行方がわからなくなった」と連絡がきたが、「あいつなら大丈夫。どこかに避難しているはずだ」くらいにしか思っていなかった。

この現場には当社の社員が4人いたのだが、うち2人が犠牲になった。会社全体での犠牲者は3人だ。いこの行方不明は今も続いているが、少しでも早く見つかってほしい。

## 避難所

震災当時は無我夢中だった。「とりあえず、道路やライフラインを確保しなければならない」と動いた。橋浦地区にあった私の自宅も津波被害を受けたため、1カ月間は小学校の避難所から現場に通った。

避難所はギスギスした感じではなく、住民みんなが協力してくれた。建設会社や消防関係の人は、先に食事をさせてもらった。早出・残業という形で仕事をしていたので、特別に優遇してくれた。私のほかにも当社の社員が数人いた。地域建設業として、自ら進んで(救助や復旧に)取り組んだので、みんなに頼りにされたと思う。避難所でも「気をつけて行ってね」という感じだった。震災を機に、地域建設業の役割を見直してもらえたのではないかな。

住民のみなさんには、現在も協力してもらっている。震災前は、ダンプがちょっとスピードを出し過ぎたりすればすぐ苦情がきたが、あまりこなくなった。みんなが被災者なので我慢してくれている。見知らぬ人から「復旧を頑張ってください」と声をかけられたこともあった。

## 将来に向けて

地域全体の話になるが、こういう大規模災害が起きても、一丸となって身を守ることでできる地域づくりをしなければならない。陰ながら協力していきたい。震災前に住んでいた橋浦地区の人々と、以前と同じような生活をしたいという思いはあるが、住民もばらばらになってしまった。過疎地域なので、出て行った人は戻ってこられない。地区に残った人が、住みよい地域づくりをしてほしい。

(インタビューは2013年11月5日)

## 高台移転

現在は、北上地区で高台移転の仕事をしている。3カ所の造成が一つの工事になっている。山を切って平らにし、人が住めるようにする。完成すれば約35世帯が入れようになる。

工期は2014年3月までだが、7~8月に伸びそう。明日にでもみんなに入居してほしいが、資材の納入が遅れたりしている。流通が回復したとはいえ、資材をすぐに持ってくるわけにはいかず、苦労している。特に足りないのは、コンクリート二次製品など。作業員や重機オペレーターも不足している。



津波被害を受けた大川小学校付近の復旧状況(2013年11月)。

## 船を使って保育園児を救出

甚大な津波被害を受けた石巻市の橋浦地区に本社を置く山内組は、地域建設業として地域を守るためにさまざまな救助活動を行った。

震災当日、水が引かない真っ暗闇の中、流れ着いた船を使って真っ先に橋浦保育所に救助に向かったのは、山内孝弘社長だ。会社の裏に地元商工会有り、1人逃げ遅れたと聞いたので、救助に向かおうとしたところ、保育所で何かを叫んでいるのが聞こえた。「15~16人が取り残されている」という。保育所で子供た

ちを救助してから、商工会に向かおうと決断した。まだ流れが強く、船につかまり、ようやく出て行ける状況だった。既に夜に入っていて、凍えるような寒さの中、山内社長が率先して水に入り、船を押して救助に向かった。

保育所は平屋建てで逃げ場がなかった。教室の中で、子供や先生、保護者が机を並べ、その上で震えていた。船に子供たちを乗せ、再び胸まで水に浸かり、船を押して安全な場所まで戻ってきた。



震災翌日の大川小学校付近の被災状況(2011年3月12日)。



凍えるような寒さの中、山中で2日目の夜を迎える長面地区の住民(2011年3月12日)。

## 石巻市の長面地区も、津波で甚大な被害を受けた。

北上川にかかる橋の一部が流され、右岸堤防は破堤。容易に近づくことはできなかったが、震災翌日に長面地区に向かったのは同社の鈴木清信土木部長だ。家族を含め、住民の安否を確認する必要があった。

冠水したままの道を歩き、大川小学校の悲惨な状況を目にした。山越えをして長面地区に向かうと、神社、林道、お寺の裏山に100人あまりの住民が避難していた。お寺の周囲のがれきには8人の遺体があった。1カ所に集め、そっと毛布を掛けてあげた。

真冬の寒さの中で一夜を過ごし、みんな疲れ切っていた。2日目の夜を迎えたが、地面が冷え切って横になることもできない。鈴木部長は一晩中、枯れ木を集めては、暖を取る火を絶やさぬよう気を付けた。早朝、毛布を被って寝ていた80代の女性が、ひっそりと息を引き取っていた。

低体温症に陥っていた。

このまま3日目の夜を迎えれば、さらに犠牲者を出しかねない。引き潮を利用して安全な場所に避難することにした。ただ、約2キロの道のりがあり、歩けない人は自衛隊のヘリコプターで搬送してもらう必要がある。

手配したヘリコプターが到着した時、自衛隊員に「搬送先の受け入れ体制は整っているのか」と聞かれた。鈴木部長はとっさに「ビッグバン(河北総合センター)で受け入れ体制ができています」と答えた。とにかく飛び立ってもらわなければ、犠牲者が増えると考えたからだ。

後日、ビッグバンは被災者で満杯で受け入れることができず、ヘリコプターは別の中学校に着陸したと聞いた。鈴木部長は今も、「自分の選択は間違っていない」と思っている。

## 山中で震える住民の命を守れ

## 作業

入社したのは栗原市内の建設会社で、石巻に復旧の応援にきていた会社だった。男性ばかりで屋外で行う仕事…。「女の自分に務まるか？」という不安はあったが、職場の人は、「自分なりにやればいい。無理をすることはない」と、温かい言葉をかけてくれ、体力的な差を感じながらも、何とか仕事をすることができた。

職場の雰囲気は、同じように被災している人だと、「自分が一番つらいんだ」と言い合ってしまうが、同僚の方々は被災者ではなかったので、私の思いを聞いてくれ、協力的で、とても働きやすかった。

一つの仕事が終わると別の場所で別の作業に就いた。場所が変わっても、やはり周りにほとんど女性はおらず、2011年6月末から2年弱の間、若生工業に入るまで男性の中でその仕事を続けた。

## 被災

震災前はホテルで接客業をしていたが、精神的にも状況的にも復帰できる状態ではなく、3カ月くらいは周囲の片付け作業に追われた。

行方不明の祖母を探すため、ある避難所を訪れた時、求人広告を見つけた。業種はわからなかったが、「ごみ拾い、がれきの片付け、道路の清掃など」と書いてあった。ボランティアや自宅の片付けで体を動かし、ものが片付いていくのを見ていると、いやな現実を忘れることができたので、「ごみ拾いでもヘドロかきでもいい。体を動かして復旧にかかわりたい」と考えて、面接を受けた。



津波被害を受けた石巻市内の住宅地(2011年3月)。



## 資格

建設会社に入社したきっかけは、落ち込んでいた気持ちを紛らわせるためだったが、次第に「奥が深くて面白い」と思うようになってきた。作業が変わり、新しいことを覚えていくうちに、重機やコンクリートの奥深さがわかり、「単にスコップを持っているだけでなく、重機や大きな車に乗りたい。特殊な機械を動かしたい」と思うようになった。

2011年10月にハローワークで被災者向けに重機の講習会があった。石巻市で20人の枠しかなく、駄目でもしようがないと思いながらも、面接で「こういう理由で、資格を取って建機に乗りたい」と志望動機を話すと(20人の枠に)残ることができ、受講して

車両系建設機械の運転資格を取ることができた。

資格を取ったからといって、すぐに仕事で使えるわけではなかったが、「資格を持つことが自信になる」と思い、目の前の作業をするには、どんな資格が必要かを調べていたら欲しくなった。それまでの貯金を使って2011年10月から仕事を休んで、那須で行われた合宿形式の免許取得講習に参加し、大型自動車免許、小型移動式クレーン運転資格、玉掛け資格などを取得し、年末までに七つの資格を身につけた。

資格取得後は、実際に資格を活用して現場で大型ダンプやバックホウを運転したりする機会があり、特に玉掛けの資格を取得したことは、作業をする上でとても役に立った。

ボランティアや自宅の片付けで体を動かし、ものが片付いていくのを見ていると、いやな現実を忘れることができたので、「ごみ拾いでもヘドロかきでもいい。体を動かして復旧にかかわりたい」と考えて、面接を受けた。

若生工業(石巻市) **武山 智恵子氏**

地震発生時は石巻市住吉町の自宅に。当時はホテルの接客業をしていて、夕刻からの出勤だった。1階が水浸しになり2階に取り残された。3日目の夜ようやく自衛隊のボートで救出され、1週間は避難所に。

..... **5:11 2:46**



若生工業建設部土木課技術員。高校を卒業し、専門学校に行きながら12年ほどホテルに勤務。震災後に2011年6月末から栗原市内の建設会社で石巻のがれき処理などの仕事に就き、2013年4月から若生工業へ。

# 若生工業

建設会社に入社し、最初にした作業の元請会社が若生工業で、初めは、現場を管理する人が作業員に次々に指示する姿を見て、単純に「格好いいな」と思っていた。スコップを持ったりはせず、雨や風の日には「作業をしなくてうらやましいな」とも思っていたが、仕事をしていくうちに、現場監督という立場が徐々に理解でき、何人かの監督さんの姿を見ていくうちに、「私には手の届かない仕事だ」と思う反面、あこがれが芽生えた。

その現場が終わってからも、作業で石巻市内を歩くと、若生工業の名前が書かれた復興工場の看板を目にする度、ずっと気になっていた。監督さんの姿やイメージが頭を離れず、若生工業の仕事と自分たちの仕事・立場の違いに興味が出て、勉強し始めていた時、ハローワークで若生工業の募集を見た。駄目で元々と思いながらも応募し、面接では、何も隠すこ



北上川右岸堤防の護岸工事(2013年11月)。鋼矢板を打ち込み、コンクリートブロックを据え付ける。



コンクリートブロック製作を担当。コンクリートの品質を確認している(2013年12月)。

となくこれまでの経緯と、私の思っていることを率直に話したら、2013年4月1日付けで採用が決まった。

うれしかった!「入社したからには、会社になくはない人間になりたい」「素人であり、女だから他人より勉強し、努力しなければならない」と心に誓った。

入社当初、先輩方が、「怒られることもあるが、(できなかったことが)できた時の喜びにはかなわない」「工事中はつらかったり、悩んだりすることもあるが、絶対に工事は終わるし、終われば一つの作品になる」「苦勞しても完成した自分の作品を見ると、何とも言えない喜びがある」と話してくれた。「時間はかかるかもしれないが、私も味わってみたい」と思った。

2013年10月から北上川右岸堤防の護岸工場の現場に配属された。鋼矢板を打ち込み、コンクリートブロックを据え付け、築堤して護岸を補強する工事で、1.8トンブロックを1日に70個ずつ製作するブロック製作を担当している。難しいがやりがいがある仕事だ。

## 将来に向けて

最終的な目標は自分が先頭に立ち、一つの工事を完成させることだが、まずは土台(基礎)から勉強しなければならない。会社の先輩や作業員からもさまざまなことを吸収し、「私はこうだ」と言えるくらいの知識と自信を付けていきたい。

故郷石巻が震災前の姿に戻るにはしばらく時間がかかると思うが、復興工事に携わることで、亡くなった肉親や大切な人たちとつながっているような気がする。(インタビューは2013年12月13日)



若生工業本社。道路側に「かんばろう!宮城」の看板。



チューリップ園から見た若生工業本社。

武山智恵子さんの面接を行い、採用を決めた若生工業の遠藤宗夫総務部長は、「女性で経験がない中、建設の仕事に興味を持ち、自分で勉強して建設業の道に入ってきたので、びっくりした」と話す。男性でも、専門の高校、大学を卒業して入ってくるケースがほとんどなのに、「よくぞ!」と思ったという。会社としても女性技術者志望の採用は初めて。入社半年なので、仕事ぶりはまだわからない。だが、すべてに前向きな武山さんの姿勢に対し、「仕事に充実感があるということは、仕事を覚えるのに一番だ。今の気持ちを忘れなければ、いい技術者になると思う」と語る。

今の気持ちを忘れなければ、いい技術者になる



がれきとがれきの間で、  
おぼれているような状況だった。  
顔や手しか見えなかった。  
子供たちが多かった。  
野蒜のびる小学校の子供たちだと思う。  
私にも同年代の息子や娘がいる  
ので、消防の人と一緒に夢中で  
引き上げた。

木村土建（東松島市） **奥田 貴則 氏**

東松島市の東名地区で、  
運河に橋を架ける工事を行っていた時に地震が発生。  
すぐに作業をやめ、全員を現場事務所前に集めたところ、  
大津波警報が発令されたという情報が。  
指定避難場所である  
野蒜小学校に避難した。

木村土建工事課課長代理。20歳で建設業の仕事に入り、2006年に木村土建に移った。「地元の会社だったので、お世話になりやすかった」という。海や川の構造物の仕事を多く手掛けてきた。建設業の仕事はトータル19年になる。

## 救助

指定避難場所である野蒜小学校に避難したところ、材木の折れるような音が聞こえてきた。振り返ると、真っ黒い波が電柱の頭ぐらいの高さで迫ってくるのが見えた。走って山に逃げるのが精一杯だった。

津波で人が流されてきた。がれきとがれきの間で、おぼれているような状況だった。顔や手しか見えなかった。子供たちが多かった。野蒜小学校の子供たちだと思う。私にも同年代の息子や娘がいるので、消防の人と一緒に夢中で引き上げた。

「あそこにもおぼれているぞ!」。校舎の屋上に避難した人が指示してくれた。がれきの中から使えるものを選び、つかまらせては引っ張り上げた。地獄のような光景だった。5~6人は引き上げたと思う。津波をかぶらなかつたはずなのに、気付けば全身びしょ濡れだった。



野蒜海岸付近の浸水状況（2012年10月）。

## 復旧工事

震災後に発注される工事は、現場に乗り込んでみると、発注条件と現場条件が違っていることが少なくない。コストに影響してくるので、そのままにはできない。発注者との協議事項が増えている。

理由としては、震災直後にコンサルタントが入ってきて設計をしたものの、発注が1年後、2年後になってしまうため、地盤条件や現場環境が変わってしまうこともあると思う。また、震災前のデータを使って発注せざるを得ないケースもあるようだ。どうしても急がなければならない工事は、震災前のデータでとりあえず発注し、計画と同時に進めていこうということだろう。実際に、現場に乗り込んでから、「計画と施工を同時に進めてくれ」と発注者に頼まれることもある。震災後はどの工事もあるような形だ。

私が担当した「松ヶ島橋仮橋設置工事」もそうだった。宮戸島（東松島市）をつなぐ橋が津波で流されたため、自衛隊と当社が通した仮設道路に仮橋を架け、壊れた橋を撤去する工事だ。宮戸島に渡る道路はそ

こしかない。「住民もいるので、急いで橋をかけてくれ」ということだった。

ある程度は震災後も測量して発注しているのだろうが、仮橋の足となるH型鋼が岩盤に当たり、地中に入っていないに苦勞した。震災で岩盤の深さが最大10メートルも変わっていた。

また、施工場所は漁業協同組合の航路となっていたため、漁船の出入りがなくなる午前10時からしか仕事ができなかった。やむを得ず、午前8時から10時までは航路に影響しない部分の工事を行った。加えて、延長約89メートルの橋だったのだが、片側からではなく両側から架けてつなぐことにした。

それでも時間がかかり、2013年3月末までの工期を8月末まで伸ばしてもらった。ただ、1月末には仮橋を供用していたので、それ以降は流された橋の撤去作業にあっていた。「橋の撤去も急ぎたい」ということだったので、設計にはなかったが、日本に3台しかない650トン吊りの大型油圧クレーンを持ってきて、橋桁を一気に陸に吊り上げることにした。橋は3径間あり、通常工法では1カ月間かかるところを3日間で撤去した。

決壊した河川を締め切るために、土のう(トンパック)が必要だった。宮城県の土木事務所から要請があり、1万2000体もの土のうを作製した(2011年3月)。



鹿児島県建設業青年部会から届けられた貴重な支援物資(2011年3月)。

東松島市では、津波による浸水被害が深刻だったので、決壊した河川を締め切るために大量の土のう(トンパック)が必要だった。宮城県の土木事務所から要請があり、木村土建では合計1万2,000体もの土のうを作製した。大型の土のう袋に山砂を詰めるが、これほど大量に作製するのは極めて異例だ。

木村土建の木村浩章常務は、「(土のう袋の)在庫がなかったので、取引先や宮城県、宮城県建設業協会から提供してもらった」と振り返る。人員も足りなかったため、仙台建設業協会から応援にきてもらい、5班で作製にあたったという。

決壊した河川を締め切るのが最優先だった。土のうを置いたのは定川、北上運河などだ。石巻・女川地区も壊滅し、土のうを作る場所もなかったため、そこで使う土のうの一部も木村土建が作製・提供した。定川は完全に決壊したため、締め切るための土のうをどう置いたらよいかもわからなかったという。自衛隊のヘリコプターで土のうを空中投下する話もあったが、結局、陸上で手前から土のうを置いていく形になった。

# 決壊した河川を締め切るため、土のうを1.2万體も作製

木村常務は、宮城県建設業協会の下部組織である宮城県建設業青年会の活動もしている。「助かったのは、宮城県建設業協会からの支援物資だ」という。青年会の船山克也会長(当時)が震災後すぐに、水やカップラーメンなどの支援物資をトラックで運んでくれた。鹿児島県建設業青年部会から届けられた貴重な支援物資だ。木村常務は連絡が着く会社に支援物資を配り、それが避難所にも届けられた。



「橋の撤去も急ぎたい」ということだったので、日本に3台しかない650トン吊りの油圧クレーンを持ってきて、橋桁を一気に陸に吊り上げることにした(2013年3月)。

また、撤去した橋桁は通常、細かく砕いてからでないと現場から搬出できない。だが、当社は独自に廃棄物処理場を持っていたので、役所とも相談の上、現場では運搬できる大きさに切って運び、処理場で細かく砕いて再利用することができた。

私は、役所との折衝や技術提案を行う監理技術者の立場だった。悩んだのは、巨大なクレーンをいかに現場に搬入するかだ。部品を運んで現地で組み立てるのだが、搬入には10台ものトレーラーが連なって走ることになる。いたるところで復旧復興工事が行われているので、通れる道路を確保するのに苦労した。搬入時間は夜間に限定され、道路の使用許可も必要だった。



橋は3径間あり、通常工法では1カ月間かかるところを3日間で撤去した(2013年3月)。

## 課題

資材も労務費も高騰しているの、原価管理が非常に難しくなっている。震災前は価格も落ち着いていたし、資材を現場に搬入するのは造作もないことだったが、今は資材の搬入計画を立てないと、工事工程が成り立たない。資材の搬入次第で工程が伸びるか、縮まるかが決まってくる。

不足しているのは採石、生コンだ。コンクリート二次製品もオーダーを流してからの製作になる。通常だと在庫があるので1~2週間で入ってくるのに1~2カ月はかかり、工程に大きく影響してくる。

震災後は工事金額が大きくなっていることもあり、一つの現場に3人の技術職員を付けて、3人体制で工事を進めている。それぞれ施工計画、搬入を含めた工程管理、現地測量による現状把握を分担している。通常であれば、搬入を含めた工程管理の担当者は置かないが、早い段階で資材の搬入状況を把握し、工程に組み込んでいく必要がある。

## 将来に向けて

復旧から復興に移ってきたとはいえ、まだまだ変わっていない。沿岸部には更地が広がっている。家を流された方は、「もっと早くやってくれ」と思っているはずだ。いろいろな課題はあるが、早く現場に乗り込み協議事項を片付け、いづらかでも工期を短縮したい。設計との価格差を減らしながら資材の搬入計画を立て、1日も早く工事を終わらせたい。

(インタビューは2013年11月5日)



東松島市にある三陸自動車道の矢本パーキングエリア(2013年12月)。



仙台方面と石巻、気仙沼方面をつなぐ三陸自動車道の矢本パーキングエリアには、大型ダンプしか駐まっていない状況だ。それだけ沿岸部の被災地では多くの建設現場が動いているということだ。東松島市は、この矢本パーキングエリアに、防災と観光・物産PRの機能を合わせ持つ拠点施設の設置を検討している。

## 三陸自動車道の矢本PA



# 俺たちが地域を守り復興を果たす



## 沿岸部2 (気仙沼支部)

- 小野寺 孝 小野良組 気仙沼市
- 小山 堅 坂口組 気仙沼市
- 藤谷 廣司 阿部藤建設 南三陸町

気仙沼地域の防潮堤の高さが決定しつつあり、ようやく用地買収や計画策定の段階に。問題が山積しているだけに海沿いの復興はこれからだ。特に南三陸町は町役場などがあった中心部、志津川地域が壊滅し、復興には時間を要しそうだ。

市は今、地盤沈下した場所のかさ上げ工事を進めている。当社も1本受注したが、仕事にかかれない状況だ。まだ家屋の基礎が残っている。基礎の撤去は別工事で発注されていて、それが終わらないと現場に入っていけない。

小野良組(気仙沼市) **小野寺 孝氏**

気仙沼市内の会社で地震に遭遇し、母親の安否確認に自宅に戻る途中で津波に襲われた。近くの鉄骨倉庫2階に駆け上がったが、腰まで水に浸かる事態に。一緒にいた人と協力して寒さをしのぎ、翌朝まで倉庫に。

小野良組常務建設事業本部長。1977年に入社。4年間は舗装工事を、5年目からずっと海の工事を担当してきた。主に気仙沼漁港の工事だ。震災時には土木部長として、横山土木技術部長とともに社内で指揮を執った。2013年6月から現職。

## 復旧

家族の無事を確認し、3月13日午後会社に到着すると、既に国道の啓開作業に取り組んでいた。社内では土木技術部長の横山(哲朗氏)と分担し、横山が陸の国道関係、私が海関係の対応にあたることになった。

国土交通省の気仙沼国道維持出張所が津波被害に遭い、11日のうちに当社の階上事務所に避難していた。出張所から1キロほど離れた高台に階上事務所

があった。その一部を国交省の事務所に提供することになり、互いに協力しながら国道の啓開作業を進めることができた。当社も本社は1階が水に浸かり、電気も通じなかったので、3階の経理を残して全員が階上事務所に移ってきた。



小野良組の本社。津波で1階部分は浸水した。

## 水産物処理

気仙沼は水産都市なので、冷蔵庫や加工場がたくさんあり、その中に残っていた水産物の処理を宮城県に依頼され、当社のほか3社が処理にあたった。冷蔵庫から水産物を回収して商港岸壁に集め、船に積み込んで海洋投棄した。船での投棄は五洋建設が担当したが、船に積める状態にするまでを私たちが行った。3カ月ほどかかったが、日が経つにつれて腐敗が進み、ものすごい臭いだった。車で現地に行くと、タイヤに付いた臭いがしばらくは取れない。冷蔵庫が無事だった水産会社からは、「壊さないでほしい」と依頼されることもあった。入り口が狭いため小さな機械しか入らず、作業に手間取った。一番厳しかったのは、商港岸壁で4トン車からど

水産物の処理作業(2011年5月)。4トン車からどろどろの魚を降ろした時に、遺体が出てきたこともあったという。



道路のかさ上げ作業(2011年4月)。

国土交通省からは、最初に国道のがれき撤去を、次に津波で寸断された部分の復旧を依頼された。主に国道45号の大谷地区あたりだ。

海関係では、宮城県の気仙沼地方振興事務所から依頼があり、商港岸壁に支援物資の輸送船を着けるので、そこまでの道路を通してほしいと頼まれた。ただ、碎石が手に入らない。かさ集めて対応したが、最終的には東京から船で運んでもらった。値段が高かったが、役所とも協議して使うことにした。合計30艘以上だから、3万~4万立方メートルの碎石を運んだはずだ。

ろどろの魚を降ろした時に、中から遺体が出てきたことだ。冷蔵庫の中は暗かったので、ショベルローダでトラックに積み込む時に気付かなかった。若い女性だったと聞いている。実際に作業をしていた当社の社員の何人かは、それを見ている。



# 復興工事

気仙沼市内は地盤沈下しているの、かさ上げをして都市計画を決めないと、道路工事も進めることができない。市は今、地盤沈下した場所のかさ上げ工事を進めている。

当社も、かさ上げ工事を1本受注したが、2～3カ月経っても仕事にかかれない状況だ。

施工現場にまだ家屋の基礎が残っている。基礎の撤去は別工事で発注されていて、それが終わらないと現場に入っていけない。

地権者との話し合いが進まない場所もある。市で土地を買収するにも、相続などの問題が解決していないのだと思う。いろいろなことが絡みあって進まない。一方では、自ら土地をかさ上げして加工場を作り、生産を再開している水産会社も出始めている。

また、宮城県から防潮堤の工事を2013年4月に受注したのだが、設計変更による工事の中止命令が出た。設計変更にかかり、10月に工事が再開された。

すぐに取りかかれない工事を発注されても、困ってしまう。図面があるので、すぐに取りかかれると思って仕事をとるのだが、6カ月も待たされてしまうのでは、ただでさえ技術者不足で大変なのに、担



漁港の復興に向けたかさ上げ工事(2013年5月)。

当技術者を待機させておかなければならない。気仙沼市から6漁港をひとまとめにして受注した工事も、すぐには取りかかれない状況だった。

推測だが「復興予算が付くので、早く工事を出しましょう」ということだと思う。暫定的に設計を組み、工事を出している状況だ。受注してみると、「まだ測量中だ」とか、「図面が半分しかできていない」と言われることもある。役所も職員が足りない。他の市町村から派遣職員がきているが、地元のことは詳しくわからないので温度差があるのではないかと。

また、海の工事では作業船を使う。1日当たりの単価も高く、作業船を呼んでおいて、仕事がないから待っているというわけにもいかない。タイミングを見て、船を手配しなければならない。

## 将来に向けて

私たちは地元に住み、地元の会社に通って働いている。何とか早く町を取り戻したい一心でがんばっている。公営住宅など住宅関係の仕事にも協力していきたい。市内のいたるところに仮設住宅があり、抜け出すには造成工事も急がなければならない。みんなが待っている。ただ、防潮堤の高さの問題などもあり、なかなか復興が進まないが、多少の無理をしてでも自分たちの町は自分たちで復興させるという強い気持ちで今後もがんばりたい。

(インタビューは2013年11月6日)



気仙沼漁港にはためく大漁旗。港町の復興をみんなが待ち望んでいる。



気仙沼市内で行われた復興区画整理事業の起工式(2013年7月)。



気仙沼市の鹿折地区の被災状況。打ち上げられた第18共徳丸は既に解体された。



復興区画整理事業では、3.5メートル(右側の標識線)まで土地をかさ上げする(2013年7月)。

# かさ上げで生活・生業の場を再構築

— 鹿折・南気仙沼地区

気仙沼市の市街地の復興に向け、鹿折地区、南気仙沼地区の区画整理事業が2013年7月28日に本格着工した。両地区とも基幹産業である水産業を中核に発展したエリア。大規模な土地のかさ上げにより市街地全体の安全を確保した上で、生活・生業の場の再構築を目指す。



顔見知りでもあるので  
断り切れない。  
無理をして引き受けたこともある。  
住宅を建てるための造成工事や  
基礎工事は、  
被災した人にとっては  
重大な工事だ。  
一日も早く自宅を建てて  
住みたいはずだ。

坂口組(気仙沼市) **小山 堅氏**

外出中に気仙沼市内の松川で地震に遭い、すぐ会社へ。  
海に近い現場で社員5人が作業していたが、  
だれも津波の経験がない。  
電話が繋がらなかったため、  
営業無線で「重機もぶん投げて、人だけ逃げろ」と指示。  
機転を利かせ、  
山手に逃げてくれたのでことなきを得た。

坂口組社長。23歳から建設業の仕事に就き、現在67歳。気仙沼支部では佐千代組の社長に次ぐベテランだ。年長者として、地盤のかさ上げが本格化してダンプが増えるにつれ、気仙沼市内で交通事故が増えるのではないかと心配する。

511 2:46

## 近隣支援

震災直後、運良く会社の事務所は水道が出たので、岩手県からきている社員にペットボトルを持ってきてもらい、水を詰めて事務所の前に置き、近隣に配った。社内に発電機があったので、炊飯器を持ってくる人には電気も提供した。

出航前に漁の仕込みを終えた多くの船が津波で流され座礁していた。船の冷凍機が回らないので、エサ用のサンマやイワシ、イカなどを提供するという

話が入ってきた。エサ用とはいえ、十分に食べることができた。ダンプに積めるだけ積んで避難所に配って回った。一方、陸でも気仙沼から首都圏など中央に魚の加工品などを運ぶ保冷車が、がれきで何台も立ち往生していた。いつまでもエンジンをかけ、車を冷やしておくことはできないので、積んでいた珍味の提供を受け、近隣に配ったこともあった。



気仙沼に打ち上げられた船(2011年4月)。エサ用のサンマやイワシ、イカなどを避難所に配って回った。

## 廃棄物処理協議会

震災翌日に、宮城県気仙沼土木事務所が当社から車で3分ほどの距離にある保健所に避難してきた。連絡手段がないので、車で往復して打合せを重ね、県道などの復旧工事を行った。

宮城県建設業協会の気仙沼支部長である阿部伊組は南三陸町に本社があり、震災から3~4日後にやっと連絡が取れた。気仙沼市~南三陸町間の道路は各所で寸断された上、電話も繋がらない状況だったため、対応に遅れが生じるということで南三陸町と気仙沼市でそれぞれ動くことになった。

そのうちに気仙沼市役所から復旧の相談があり、気仙沼支部副支部長である小野良組と、クマケ建設、私の3人で土木課に行って、部長と打ち合わせをした。ほとんど毎日、夕方5時以降に打ち合わせをしながら、市内の復旧作業を進めてい

った。当初は重機が足りなかったため、自衛隊に貸したりもした。最初の復旧作業は、がれきの片付けと道路の確保、遺体捜索だ。これらをやりながら、災害復旧体制の立ち上げをした。

具体的には、本吉地区を含む幹事会社7社を中心に廃棄物処理協議会を組織し、小野良組の佐藤講悦社長(現在は会長)が代表幹事に就いた。協議会の初会合には80数社が集まり、「オール気仙沼体制」が整い、みんなで一緒に対応した。協議会で窓口を1本化し、がれき処理や水産物の廃棄、遺体捜索などもすべて対応した。

協議会を立ち上げたのは、震災からおよそ2週間後だ。がれきが片付いたので、2013年3月に解散したが、気仙沼市から要請があり、協力会という名前で組織を残し、建物基礎の解体などを行っている。個々に対応するのは大変なので、窓口を残してほしいということだと思う。



廃棄物処理協議会として行ったがれきの撤去作業。

# 民間対応

当社は以前から、公共工事だけでなく民間工事も結構やってきた。地元には被災して困っている人もいる。事務所に直接きて頼まれると、顔見知りでもあるので断り切れない。無理をして引き受けたこともある。住宅を建てるための造成工事や基礎工事は、被災した人にとっては重大な工事だ。一日も早く自宅を建てて住みたいはずだ。



住宅を建てるための基礎工事。顔見知りにも頼まれると断れないという。

(工事量を)ある程度加味しながら、役所の災害工事も行ってきたが、今のように人や資材が足りない中で、他から応援をもらおうとどうしても工事費が高くなってしまふ。当社では、できるだけ民間工事は自社の人間で対応することになっている。資材などに加え、人件費まで高くなったのでは、「この程度で」と考えていた予算が2~3割も上がってしまう。被災して大変なのに、工事費まで上がったのでは、建てるものも建てられない。

社員の3分の2は民間工事に回し、地元の人に頼まれた工事に関しては、社内の直営部隊でやろうと心がけている。そういう思いでがんばっている。



住宅を建てるための基礎工事。他から応援をもらおうとどうしても工事費が高くなってしまふので、できるだけ自社の人間で対応することになっている。

# スピード

気仙沼では今後、護岸工事や土地のかさ上げの工事が本格化すると思う。UR(都市機構)の仕事は大手ゼネコンがやっているが、当社もJV(共同企業体)の一員として協力している。地元で応援できることはしていかないと、どうにもならない。東京オリンピックの話も出ているので、復興工事を急がないと大手がそちら(の工事)に移ってしまう。資材も人もそうだ。スピードを速めることを考えないと、復興が遅れてしまう。

気仙沼市小泉地区で行われていたがれき処理もほぼ終わり、(従事していた)人が余っていると聞く。だが、主に他業種の人が多く、建設業の仕事にきてもらっても対応は難しいだろう。作業員が足りないのを知り合いに手伝ってもらっているが、半年や1年で慣れるものでもないし、職人にはなれない。軽作業をしてもらうしかない。ダンプの運転手も重機オペレーターもそうだ。免許証を取ったからといって、すぐには現場で対応できない。

# 将来に向けて

気仙沼はきれいな港町だったが、津波で被災してしまった。「復興しよう、まちづくりをしていこう」とがんばっている人たちもいる。地元の自分たちが動かないと、まちづくりにも時間がかかってしまう。防潮堤の高さの問題もあるが、話し合いで良い方向にいくようにはなってきていると思う。早く復旧・復興をして、かつてのような町をつくりたい。(インタビューは2013年11月6日)



気仙沼漁港から出港しようとしているカツオ漁船(2011年9月)。



# 港町・気仙沼の復興を早く...

左：気仙沼漁港は1階部分が浸水(2011年9月)。下：早期に復旧して営業を再開した(2012年10月)。





建設業界と自衛隊が  
組んだおかげで、  
がれき撤去と遺体捜索は  
他の地区より早く終わった。  
自衛隊の大英断だったと思う。  
重機を運んでもらったこともある。  
最初は断られたが、  
3~4日後には連隊長が決断し、  
運んでもらえることになった。

阿部藤建設(南三陸町) 藤谷 廣司氏

海沿いにある会社(工務部)の建物で地震に遭った。  
すぐベイサイドアリーナ(南三陸町総合体育館)に避難。  
「3階まで水がきた」と聞き、  
「そんなことはないだろう」と思いながらも、  
暗たんたる気持ちになった。

阿部藤建設社長。仙台の建設会社に勤めていたが、23年前に奥さんの実家である阿部藤建設に移った。建設業の仕事はトータルで30年。社長になってからは6~7年だという。

## 社員が

当社の本社は海から約50メートル、工務部の建物は約200メートルの場所にあった。震災翌日に町を歩くと、普段とは全く違う状況になっていた。案の定、本社や工務部、さらには自宅も流されていた。

3月12日にベイサイドアリーナに(南三陸町の)災害対策本部が置かれた。本部に集まってきた人から、「お宅の社員が今、道路のがれきを撤去しているぞ」と聞かされた。すぐには信じられなかった。社員の安否確認もまだだったので、避難所を回りながら、がれき撤去の現場を確認しに行くことにした。

## 拠り所

南三陸町には宮城県建設業協会の会員企業が8社ある。8社のうち5社で会社建物が全壊・流出した。会員企業以外も含めると、南三陸町には大小合わせ24社ほどの建設会社がある。連絡を取り合って南三陸町のメンバーが集まったのは、震災から1週間程度経ったころだと思う。重機を持ってこることができたのは12~13社だった。

班編制をして、各社を3班に分けた。打ち合わせを行った場所は、ベイサイドアリーナ近くの佐千代

## 自衛隊

3日後に自衛隊が入ってきた。自衛隊が遺体捜索をする時、がれきをどかしながら捜索するのだが、その後でもう一度我々ががれきを撤去するとなると、二度手間になってしまう。一緒に行えば一度で済む。南三陸町の災害対策本部との打ち合わせの中で、「自衛隊とも打ち合わせをしたい」と申し入れた。本来なら、自衛隊と民間と一緒に仕事をするのではない。提案すると、南三陸町にきてくれた自衛隊の連隊長が理解のある方で、「ぜひ、そうしましょう」と言ってくれた。即決だった。

毎日、夕方に自衛隊と打ち合わせを行うことにな

とめ  
登米市から入ってくる国道398号の津波の最終到達地点で、社員ががれきを撤去していた。その近くの会社で重機が流されずに残ったのだが、オペレーターがいなかったため、当社の社員が乗り込みがれきを撤去していた。建設業界には、「どんな時でも最前線にいて、仕事をやらなければならない」という使命感がある。誰の指示もないのに、自ら率先してがれきの撤去をしていた社員の姿を見て、「(これが)うちの業界だよな」と思った。

翌13日からは、動いている重機と社員で、できる限りのことをしようと動いた。

組だ。宮城県建設業協会の会員企業で、会社建物が残っていて、大きめの会議室もあった。そこを我々の対策本部にしてすべての情報を集めた。

震災直後は車もガソリンもなかった。移動手段がなく、連絡の取りようがなかったが、佐千代組に毎日顔を出していればいろいろな情報が入るのが、我々の拠り所だった。いかに情報を共有できる状況を作るか。震災前から防災対策の一つとして、決めておかなければならない。

南三陸町での自衛隊の活動状況。建設業界と連携がうまくいったことから、がれき撤去と遺体捜索は他の地区より早く終わった(提供・第4師団第40普通科連隊)。



った。「明日はここの遺体捜索をするので、建設業界の方はダンプを出してください」「機械が足りないので、機械も一緒に持ってきてください」と頼まれた。

我々が後方支援をしながら、遺体捜索とがれき撤去と一緒に進めた。「どこに何があるかは、地元の人が一番わかっていると思う。遺体がありそうな場所を教えてください」と聞かれ、我々から捜索場所を提案することもあった。自衛隊はまず、我々の意見を聞いてくれた。

建設業界と自衛隊が組んだおかげで、がれき撤去と

## 交流

自衛隊とは信頼し合ってがれきの撤去作業ができた。地元の人間として、遺体を1体でも多く見つけ、遺族の元に帰してやりたい使命感があった。自衛隊が帰る時、町民が「助けていただいてありがとうございました」という横断幕をあちこちで掲げた。

いまだに自衛隊の方々とは交流がある。南三陸町にきてくれたのは、北九州市の第4師団第40普通科連隊だ。震災後も1年目、2年目の追悼式に出席してくれた。南三陸町の建設業界で北九州市を訪ね、南野延寿さんに会い、お礼のあいさつをさせてもらったこともある。震災当時、第3科長としてナンバー2の立場にあった方だ。南野さんは、ことあるごとに連絡をくれ、「どうですか」と気に掛けてくれた。子供を連れてボランティアにきてくれたこともある。



お礼のあいさつに北九州市を訪問した際の藤谷氏(左)と南野氏。

遺体捜索は他の地区より早く終わった。自衛隊の大英断だったと思う。我々の重機を運んでもらったこともある。別の場所で遺体が発見されると、午後には移動しなければならない。自衛隊はトレーラーで重機を移動するが、我々にはない。「我々の重機も運んでもらえませんか」と頼むと最初は断られたが、毎日それが続くものだから、3~4日後には連隊長が決断し、民間の重機も運んでもらえることになった。



町民が掲げたお礼の垂れ幕(提供・第4師団第40普通科連隊)。

## 将来に向けて

1日も早く、高台にみんなが安住できる場所を造っていくのが我々の仕事だ。もし、その最中に災害があったとしても、最前線で活動できる体制にしておかなければならない。町ができれば我々の仕事はなくなる。細く長くやれば、我々の仕事は長く続くが、そんなことは言っていられない。とにかく早く、みんなが町に戻ってこなければ、復興は実現しない。

(インタビューは2013年11月6日)

「建設業は因果な商売だ。何をやっても当たり前だと思われる」。阿部藤建設の藤谷廣司社長はこのように話す。例えば、震災から1~2週間後に、「自衛隊が南三陸町の道路を開いて入ってきた」というニュースが流れた。だが、啓開作業を行ったのは地域建設業だ。「俺たちがやったのになあ」と思ったという。

自分たちの取り組みをPRしたかったので、東日本大震災の記録誌「宮城県建設業協会の闘い」が2012年12月に発行された時、藤谷社長はボランティアや町の人に何十冊も配った。取材にきたマスコミにも配ったところ、みんなが真剣に見てくれた。

ある新聞社に「(そんな活動をしていたことを)我々は知りませんでした。ぜひ、建設会社の特集を組みたい」と、取材のセッティングを頼まれたことがあるという。だが、取材に行っても、重機のオペレーターをはじめ、返ってくるのは「いや、建設業

地域建設業の活動を知ってもらおうと、宮城県建設業協会では東日本大震災の記録誌を一般市民にも配布した。震災に関するフォーラム・展示会への来場者や仙台市内の全町内会に記録誌を無償で配ったところ、一般市民から感謝の手紙やメールが続々と寄せられた。

「建設業の意義を再認識させると同時に、業務に携わる人々の崇高な使命感や現場力に頼もしさをわき上がらせませす」「震災直後から、昼夜を分かたず住民の救助や道路補修、がれき撤去などにご尽力いただいた

## 一般市民から感謝の手紙やメールも

## 表舞台に立てない「建設業の本音」

界として当たり前のことを行っているだけです」という言葉のみ。どこに行っても同じ答えだったので、新聞社に「記事にならないですよ」と言われたという。

「だが、それが俺たちの本音だ」。藤谷社長は、「黒子であり縁の下の力持ちであり、決して表舞台に立つことはないかもしれない。だが、緊急時には我々が震災対応の活動をしていかなければならない」と思っている。



ことに謝意を申し上げます」といった内容だ。過酷な経験をした協会の生の言葉に、「一枚一枚の写真、一言一言が重く、心にしみます」「埋葬も主体が建設業であったなど知らなかった」といった声も。

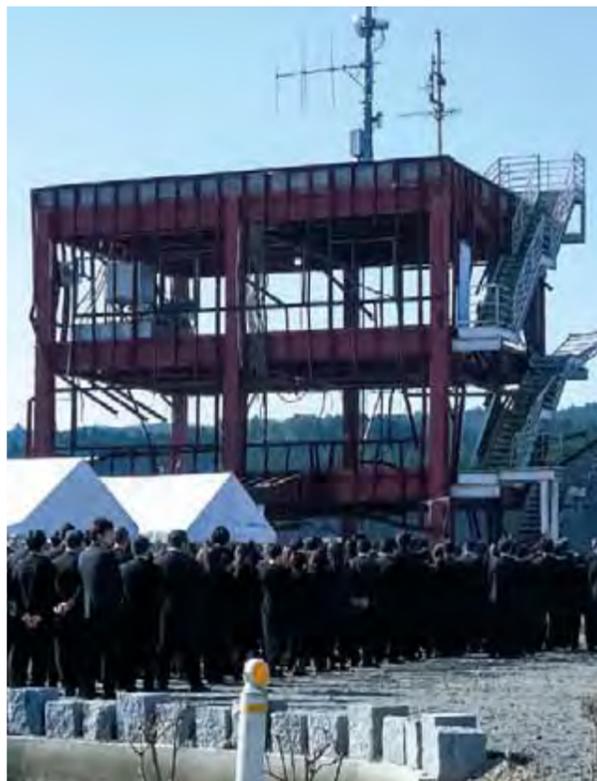


(撮影 水本圭亮)

上・下：防災対策庁舎の慰霊祭。秋晴れの空に、「私の声が届いていますか」と犠牲者に問いかける町長の言葉が響いた(2013年11月2日)。

## 防災対策庁舎の慰霊祭

津波で多くの犠牲者を出した南三陸町の防災対策庁舎では、2013年11月2日に慰霊祭が行われ、さまざまな思いを胸に多くの参列者が献花を行った。



# 俺たちが 地域を守り 復興を 果たす



### 内陸

青沼 裕一郎  
只野 英博

(大崎支部、登米支部、栗原支部)

丸か建設 加美町  
只野建設 登米市

地震被害はあったものの、震災直後は沿岸部の道路啓開やがれき撤去などの支援に回った。ただ、沿岸部の道路啓開やがれき処理が一段落し、内陸の地震からの復旧もほぼ完了。地元地域に仕事がないという悩みを抱えている。



13日の早朝4時50分に、社員2人と作業員8人を排水ポンプ車と出動させた。

がれきだらけで、どこを<sup>おおまがり</sup>通ってよいかわからなかったようだが、幹線道路を走って大曲地区にたどり着いた。

6時35分に現場に到着し、7時45分から排水作業を開始した。

丸か建設(加美町) **青沼 裕一郎氏**

地震発生時には運転中だった。

すぐに大崎市三本木にある

鳴瀬川維持工事の現場事務所に戻り、作業員に

「家族の安否確認をし、すぐに戻ってこい」と指示。

自らも一度自宅に帰ると、中はめちゃくちゃだったが、家族は無事だった。

..... **311 2:46**

丸か建設工務グループ土木課に所属し、現在も鳴瀬川の維持工事の現場代理人を務める。入社13年目。最初はほ場整備を担当していたが、河川工事を担当するようになって4年目に入るといふ。ほ場整備のころから現場代理人に。

## 維持工事

震災時も鳴瀬川の維持工事を担当していた。維持工事の中に、河川パトロールという工種があり、震度5以上の場合には、現場パトロールをしなければならない。

社員と作業員を3班に分け、鳴瀬川、多田川、江合川、新江合川をパトロールした。私は現場代理人だったので、現場に出向かなかったが、

## 内水排除

鳴瀬川の維持工事の仕事には、河川パトロールのほかに内水排除という作業もある。河川が増水し、民家のある市街地側に水がたまった場合、排水ポンプ車でくみ上げ、河川に流す作業だ。作業をするため、常に三本木の防災ステーション(消防署)に国土交通省の排水ポンプ車が置いてあり、要請があれば当社が出動させることになっている。

今回の震災では、津波の影響で石巻市の<sup>おおまがり</sup>大曲地区に水がたまり、3月12日午後5時50分に国土交通省の北上川下流河川事務所から排水ポンプ車を出動させるよう要請があった。石巻市から国土交通省に要請が行き、そこから当社に回ってきた。

鳴瀬川の維持工事のパトロールもしなければならず、私は行くことができなかったが、13日の早朝4時50分に、社員2人と作業員8人を排水ポンプ車とともに出動させた。がれきだらけで、どこを<sup>おおまがり</sup>通ってよいかわからなかったようだが、幹線道路を走って大曲地区にたどり着いた。ある程度、道が造られて

破堤してクラックが入り、天端(堤防の上)も歩けない箇所があった。すべて地震による被害だ。



大曲地区に派遣した社員と作業員(2011年3月)。

いたものの、がれきを脇に寄せただけで、車1台がやっと通れる場所もあったという。6時35分に現場に到着し、7時45分から排水作業を開始した。

国土交通省から出動要請を受けた時、排水ポンプ車をどこに配置するかもわからなかった。12日の夕方うちに、私は1人で大曲地区へと下見に出かけていたのだが、途中で道がふさがれてたどり着けなかった。真っ暗で辺りの状況はわからず、ここまでの被害があるとは思っていなかった。

大曲地区では丸太で道路が遮られ、流された車があちこちに散乱していた。バックホウを使って撤去し、手探りで遺体を捜索しながら、海側へと進んでいったようだ。(排水ポンプ車を派遣した)13日夜に再び私も現地に向かったが、「夜間にはあまり1人で出歩かない方がいい」と言われた。油を抜く者もいるなど治安が悪く、パトカーが巡回していた。

他県からも排水ポンプ車がきて、大曲地区周辺では暗くなるとあちこちで赤ランプが光っていた。排水作業は3月31日まで24時間体制で行った。まだ、作業を続けている排水ポンプ車もあったが、国土交通省から指示があったので当社は引き上げた。



排水ポンプ車による排水作業(2011年3月)。



鳴瀬川右岸の35.5キロ地点付近 (2013年11月)。



水鳥が遊ぶ鳴瀬川。既に震災の傷跡は感じられない (2013年11月)。

鳴瀬川は、宮城県と山形県の境にある船形山を源流に、ササニシキなどの穀倉地帯でもある大崎平野を貫流する一級河川だ。流域には仙台北部中核工業団地などもあり、産業も集積している。多田川や新江合川などと合流し、最終的には東松島市で太平洋に注ぐ。丸か建設が国土交通省の東北地方整備局から維持工事を受託しているのは、鳴瀬川の右岸、左岸の合計21.8キロ、多田川の右岸、左岸の合計7.0キロ、新江合川の1.4キロ。これだけの範囲について、除草やパトロール、補修などの応急処理工を日常的にカバーしている。

## 鳴瀬川の維持工事とは？

24時間2交代で作業をしたが、結果的に見つからなかったようだ。

排水ポンプ車が富士川に最初に出動した時には私も同行した。帰りに風邪を引き、熱を出したのを覚えている。大川小学校には、今も毎日のようにだれかが慰霊にきているが、学校を見るだけでもつらい。



新江合川での復旧工事 (2012年1月)。クラックの最深部まで堤防の土を除去し、セメントで土を改良して盛土を行った。

## 将来に向けて

現在、江合川の復旧工事を2、3本やっているが、2013年度には終わる。それで内陸(である大崎地区)の震災関連工事はほとんど終わってしまう。社会的には、(林野関係の)山の仕事と川の仕事があり、山の仕事は雪の前に終わるので、冬場は人が空いてしまう。去年まではあちこちで震災復旧の仕事をしていたので、「早く山から上がってこい」という状況だったが、今では仕事がない。沿岸部での復旧工事はこれからのようなので、今後は沿岸部の仕事もとっていかねばならないのかもしれない。

(インタビューは2013年11月26日)

## 遺体搜索

排水ポンプ車は5月20日から、北上川の月浜第一水門に出動した。この時の排水作業は遺体を搜索するためだ。自衛隊、消防、警察と一緒に排水作業を行ったが、遺体が発見されたという話は聞いていない。

2013年1月から2月には、(津波で甚大な被害を受けた)石巻市の大川小学校近くの富士川で排水作業を行った。やはり遺体搜索のためだ。遺族にすれば見つけてほしいと思っているはずだ。

## 復旧工事

鳴瀬川の堤防では破堤や亀裂が生じ、沈下も発生した。雨が降ってクラックに水が入り、二次災害がないようブルーシートで養生する作業も維持工事として行った。クラックは数100カ所、堤防の沈下も10カ所以上あった。

堤防自体が崩れて機能せず、(維持工事とは別に)当社が緊急災害復旧工事を請け負ったところがある。鳴瀬川左岸の30.3キロ地点だ。崩れないよう鋼矢板で締め切り、土を戻して堤防の形を造る工事だ。盛土もかなりの量があったはずだが、24時間体制で急いで行った。

一時期、私は鳴瀬川の維持工事を離れ、新江合川の復旧工事も担当した。沈下してクラックが入った堤防の復旧工事だ。クラックが何メートルも深く入ってしまったので、最深部まで堤防の土を除去し、セメントで土を改良して盛土を行う必要があった。「切り返し盛土」という。ただ、新江合川は堤防が狭く、ダンプで資材や土を運搬するための工事用道路を延長2キロも造る必要があった。工事用道路を造ってからメイン工事になるので、結構、苦労はした。



登米支部管内の対応状況(2011年3月)

## 登米支部

3月12日早朝に携帯電話が鳴った。太田組(登米市)の太田陽平社長から、「宮城県建設業協会の本部から連絡があり、(国道346号の)山吉田橋の前後が沈下しているらしい」という話だった。待ち合わせもできないので個別に確認に向かった。その時はまだ、同協会の登米支部自体が機能していなかったため、本部から直接、太田さんに電話が行ったのだと思う。当社の協会対応は、私ではなく社長がやっている。勝手な動きもできないので、山吉田橋の復旧作業は太田さんをお願いすることにした。数日後に登米支部が動き出した時、既に太田さんは復旧の対応を始めていた。

当社の社長は登米支部の役員として、登米市役所の防災課に常駐していた。私は協会の登米支部に詰め、会社の対応は部長に任せることにした。

登米支部では、交代すると話が伝わらないので、決まっただれかが登米市役所、宮城県東部土木事務所、登米地域事務所などに常駐し、役所の情報を支部に伝えることにしていた。登米支部には3~4社が

詰めていて、要請が簡単な内容であればそのまま会員企業に割り振る。面倒な内容であれば現地を確認しに行き、何が必要かを含め会員企業に伝えるような構図だった。

防災協定もあるので、会員企業は1~2カ所の震災対応の要請を登米支部から引き受けている。ただ、各社とも手持ちの対応に追われ、要請を受けてくれるところがなくなってきた。最終的には登米支部に詰めていた数社が要請を引き受ける形になってしまった。毎日ではないが、1カ月間は登米支部に詰めていた。

登米市内は、建物倒壊などはあったが、電気さえ通れば住むことができた。要請は(沿岸部の)南三陸町や石巻市の仕事がほとんどだった。最も早く動いたのは、登米市から南三陸町に入る国道398号だ。渡波町、雄勝町、女川町、北上町でのがれき撤去もあった。

登米支部管内の被災状況(2011年3月)。



復興が終われば  
震災前以下の  
仕事量になるだろう。  
沿岸地域の会社とタイアップして  
いければよいと思う。  
地元のルールがある中で、  
沿岸部にいかに根付いて  
いけるかを模索しているところだ。

只野建設(登米市) **只野 英博氏**

三陸自動車道の  
利府中インターチェンジの手前で地震に。  
同乗者に「浜回りはあぶない」と言われ、  
内陸側の道路を選んで登米市の本社へ。  
橋の段差で通れない箇所もあり、  
会社に戻ると午後6時半を回っていた。

..... 311 2:46

只野建設専務。2002年入社、これまで主に国土交通省や宮城県発注工事の仕事を担当してきた。宮城県建設業青年会でも活動していて、震災後には青年会メンバーと震災対応の方法などを相談したりしたこともあったという。

## 不慣れ

石巻地域では国土交通省の仕事の経験があったので地域対応できたが、気仙沼市や南三陸町での仕事はやったことがなかったので、知らないところで仕事をするのは大変であった。

現在行われている工事では、監理業務にコンサルタントが入っている。監督職員の下に監理コンサルタントが入り、工事的な話はすべてを通さなければならない。お金については自治体の監督職員と話をしなければならない。根回しをしてすべて了解をもらっても、「金が高いからダメだ」となれば振り出しに戻る。よい方法を提案しても、金が合わなければ、また違う方法を考えなければならない。震災後のルールだと思うが、(施工会社の)技術者にしてみれば大変だと思う。

報道などで「復興が遅れている」と言われるが、当社では技術者を休ませている。体を壊されては大変だ。商売人としては失格なのかもしれないが、ある程度リスクはしようがない。体を壊して辞められたら、会社を運営できない。



南三陸町で進めている合羽沢の造成工事(2014年2月)。

## 内陸の悩み

震災を機に、「建設業者は地域に頼られている」と感じた。登米市や豊里地区では、建設業者の位置づけも上がったと、私は思う。だが、内陸には公共事業も含め仕事がない。これからの課題は、登米市の会社が石巻市や南三陸町などの沿岸部にどう根付いていくかであると思う。

登米市に本社がある以上、完全に根付くことはできない。どういう形で沿岸部の仕事に携わっていくのか。復興が終われば震災前以下の仕事量になるだろう。沿岸地域の会社とタイアップしていればよいと思う。それぞれ地元のルールがある中で、只野建設として、沿岸部にいかに根付いていけるかを模索しているところだ。

私たちの会社は登米市でも豊里町にある。石巻市の隣だし、南三陸町までは車で25分だ。復興後の(インフラの)維持管理は地元の会社がやるだろうが、下請けとして使ってもらうなど、未来像を考えておかないと本当に仕事なくなる。

## 将来に向けて

会社の規模的な議論もしなければならない。現在は15~16人の技術者を抱えているが、復興が終わっても現在の規模を維持できるのか。65歳までの雇用になっているが、若い技術者を入れながら10人程度に縮小しないと残っていけないかもしれない。ただ、地域に根付いていれば、何らかの仕事はあるはずだ。登米市であれ、南三陸町などの沿岸部であれ、どれだけ根付くことができるかは、これからの工事のやり方次第だ。

(インタビューは2013年11月27日)

# 俺たちが 地域を守り 復興を 果たす



**県南** (名亘支部、仙南支部)  
**日下 実** 春山建設 岩沼市  
**春日部 泰昭** 春日部組 丸森町

想定外の津波に襲われたが、海沿いでは海岸堤防の復旧工事が行われ、集団移転のための土地造成なども進展。

一方、仙南支部管内の内陸は復旧が終わり、

仕事がない状況に。

福島県に近い丸森町では、放射線の除染作業の苦労も。

1 22 + 23  
8 29 30  
5 6 7  
2 13 14  
9 20 21  
16 27



海岸堤防の復旧工事が  
完成した後に植樹祭があり、  
太田昭宏国土交通大臣らが  
きた時に、息子も連れて行って  
一緒に植樹をした。

当社の別の者が担当した  
工区だったが、  
息子に「こんなのを造ったんだぞ」  
という話はした。

春山建設(岩沼市) **日下 実氏**

地震時は名取市内の現場事務所にいた。  
海から約1キロの河川工事の現場だ。  
すぐみんなを連れて指定避難場所に逃げた。  
現場事務所は流されたが、  
オペレーターが高台に移動してくれていた  
ので重機は無事だった。  
日ごろの避難訓練の成果だ。

..... **311 2:46**

春山建設工事部工事課主任。建設業界に入って23年になる。春山建設は2社目。前の会社では道路、下水道などの都市土木工事を、春山建設では河川、海岸工事を担当してきた。

## 遺体

震災後、流木や家屋のがれきが貞山運河をせき止めているので取り除いてほしいと、塵芥処理作業の要請が宮城県からきた。仙台空港から阿武隈川までの延長約12キロだ。仙台空港の駐車場が近くにあったので、そこから流された車も多く、計78台引き上げた。潜水士が川の中の車にワイヤーをかけ、引き上げた。川底には40~50センチもヘドロが溜まっていて、その中までは確認できないということだった。

2台の車から遺体が見つかった。自衛隊や警察に連絡するために、私も自分の目で確認した。最初の車が3人、2台目が2人。津波から逃げる途中だったのだと思う。気が張っていたので、ショックもあまり感じなかった。それより、「家族の元に帰すことができて良かった」という思いが強かった。身元不明の遺体もたくさんあった。

遺体が見つかったのは、空港の目の前だ。気付かないくらいの深さだったが、水位の満ち引きが激し



貞山運河で行ったがれき撤去作業(2011年3月)。引き上げた2台の車の中から遺体が。家族の元に帰すことができた。

く、一番引いた時に車の天井がうっすらと確認できた。

貞山運河での塵芥処理作業は2011年6月末までやっていた。

## 作文

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会が主催する「私たちの主張」という作文コンクールに2013年6月に応募し、10月17日に表彰を受けた。毎年、会社から「何か目標を立てなさい」という指示があり、今年は「論文で受賞する」という目標を立てていた。文章を書くことは嫌いではない。3年ほど前からずっと現場のブログを書いていた。現在は「仙台湾南部海岸堤防復旧工事」というブログ名だ。

作文は3日程度で構想を練り、1日で書き上げた。会社の提出期限があつて催促がきていた。タイトルは「父の背中」。私の親父が建築士をやっていて、それを見て育ったので建設業に入ったという話から始まる。また、自分が小学5年生の時に「僕のお父さん」という作文を書いたのを覚えていた。それが最初のくだり、建設業に入ってから現場で経験したいろいろなことを書いた。長男が2014年に小学5年

生になるが、私の背中を見てどう思うかということが、作文の最後に書いてある。

2013年9月末に内々に受賞の知らせがきた。国土交通大臣賞と土地・建設産業局長賞があるのだが、大臣賞だとわかったのは10月の正式発表の3日前だった。国土交通省に行つて高木毅副大臣から表彰状を受け取り、メルパルクホール(東京都港区)で開かれた式典で作文を朗読した。

受賞はうれしかった。どういう賞がよくわからない様子だったが、妻も喜んでくれた。震災発生時に妻は妊娠中だった。震災当日も早く帰ってやりたかったが、会社で待機がかかったため帰宅は夜中だった。

# 同じ現場事務所から 連続で入賞者

らうものだ。  
春山建設では、2012年度にも平塚剛士氏が土地・建設産業局長賞をもらっていた。平塚氏は現在、国土交通大臣賞を受賞した日下実氏と同じ仙台湾南部海岸堤防復旧工場の現場を担当している、一つの現場事務所  
に大臣賞と局長賞の受賞者がいることになる。

国土交通大臣賞

## 「父の背中」

春山建設 日下実

ぼくのお父さんは設計士です。毎日机に向かい、定規を上手に使いながら、おうちの図面を書いています……。小学五年生の時、作文でそんなことを書いた記憶がある。

自営業だったため、毎日仕事をしている父の背中を見ながら育った私は、建設業の道へと進んだ。これが様々な職業があるなかで、建設業を選んだ理由だ。

入社して3年位経った頃、初めて担当した自分の現場で、自分が測量して掛けた丁張り通りに、きれいな弧を描いて据え付けられた大型水路。竣工検査前に、先輩の操作する高所作業車に乗り込み、20mから見おろす恐怖と闘いながら完成写真を撮った。その時の写真は、今も私の名刺入れの中にある。

自分が先頭に立って造り上げた現場。いろんな苦労があったが、竣工してスケールの大きい完成物を見てしまえばそんな苦労も吹き飛んだ。

達成感がもたらしたモノ。苦労が無ければ得られなかったモノ。そのモノがあったからこそ20年以上もこの仕事を続けて来られたのだと思う。

私の仕事であるこの建設業は、決して楽な仕事ではない。これは、断言できる。強

い日差しの中の作業、雪が舞っている時も休めない。残業も当然あるし、竣工間際は休みが無い時だってある……。そんな挫折しそうな時、名刺入れに入っている写真を見て、あの頃を思い出す。

そんな過酷な仕事なのに、私がこの建設業を続けている理由は、他にある。

東日本大震災を経験し、それが再確認できた。震災前からも、降雪時の除雪作業や大雨時の緊急復旧工事にも従事してきた。

今回の東日本大震災では道路の啓開、ガレキ処理に奔走した3ヶ月。その後の海岸や河川の堤防復旧工事など……。建設業に従事しなければ味わうことのできなかった使命感。そして何より地域の人たちを守っているという誇り。

これが、建設業に従事していて良かったと思える瞬間。

でも、災害対応は危険を伴うし、へまをすれば自分だって被災してしまう。また、同じ目に遭っている家族を家に置き去りにして、被災した地域のために復旧活動をしなければならぬ。

苦労に優る充実感と使命感。そして誇り。これが無かったらこの職業を続けてはいなかっただろう。

『ぼくのお父さん』。

私が書いた学年に来年、息子は進級する。息子は将来をどう考えているのか？親としても興味がある。建設業に従事しろとは言わないが、何の職業でもよいから、人のた



初めて担当した水路の完成写真  
今も名刺入れの中にある。

め世のため、仕事をするからには一生懸命頑張れ！と、助言する。私の背中を見て育ってれば、建設業に従事するかもしれない。まずは、息子がそう思えるように私自身が必要ならなければならないと思う。

私が小さい頃に思ったように……。

## 息子

息子はまだ、作文の内容がよくわかっていないのではないか。東京での表彰式だったので、「おみやげ、お願いね」とだけ言われた。ただ、私の仕事をわかってほしいという思いはある。

仙台湾南部海岸堤防の復旧工事が2013年3月末に完成した後に植樹祭があり、太田昭宏国土交通大臣らがきた時に、息子も連れて行って一緒に植樹をした。私の担当工区ではなく、当社の別の者が担当した工区だったが、息子に「こんなのを造ったんだぞ」という話はした。妻は下の娘をあやしていたので、息子だけが植樹をしたが、楽しそうだった。

くれない。2012年にも仙台湾南部海岸の工事を担当したが、2013年の生コン不足はさらにひどい状況だ。全国的に忙しいのか、山形など他県の業者も手伝いにきてくれなくなった。



現場代理人兼監理技術者を務めている仙台湾南部海岸の堤防工事(2013年10月)。津波で壊滅的な被害を受けたため、取り壊して新たに堤防を復旧する。

## 海岸堤防工事

現在の仙台湾南部海岸の堤防工事では、現場代理人兼監理技術者を務めている。津波で堤防が壊滅的な被害を受けたため、取り壊して新たに堤防を復旧する工事だ。当社の担当する区間の延長は約300メートルだ。

苦労しているのは資材の入荷予測だ。生コンは1カ月前から予約しないと入ってこないが、そこに工程を合わせるのが難しい。生コン車やコンクリートポンプ車も足りない。そこに天候もかかわってくる。キャンセルしてしまうと入ってこない。本来は予備日があるのだが取って

## 将来に向けて

地域の人たちは、早く仮設住宅を出たいようだ。集団移転の現場の担当者は、「早く造ってね」と言われるらしい。仙台湾南部海岸の復旧工事は通行止めになっているので、地域の人に声を掛けられることはないが、なるべく早く造って安心・安全を届けてあげたい。1000年に1回の大きな津波でも壊れない、粘り強い構造で施工している。将来、思い出した時に満足できる仕事がしたい。

(インタビューは2013年11月27日)



復旧工事後に仙台湾南部海岸堤防で行われた植樹祭(2013年6月)。

朝、顔を出し、やるべきことや状況を確認した。

印象に残っているのは、連絡が取れない、情報が無いということが、これほど大変なのかだ。防災訓練も行っていたが、電話が通じる状態での訓練だった。身動きが取れず、応急的な仕事だけで1週間は休まざるを得なかった。社員は毎朝、会社に来てくれたが、「今日は何もないので解散」という状況が続いた。万が一、役所から要請が入った時のことを考えると、通常工事の作業をするわけにもいかなかった。



震災直後の落石の撤去作業(2011年3月)。なかなか情報が集まってくないので、率先して落石の片付けなどをしていた。

会社は停電になり、固定電話も、携帯電話もつながらず、全く状況がつかめなかった。現場との連絡も取れない。1班は福島県相馬市で工場の仕事をしていましたが、すぐに戻ってきた。その現場にも津波がきたと後に聞いたが、社員は全員無事だった。

## 情報途絶

強い地震だったが幸い、丸森町周辺に建物が倒壊したところはない。ただ、落石などはかなりあった。私は、宮城県建設業協会の仙南支部の連絡責任者でもあるが、丸森地域の災害対策協議会の会長も務めている。およそ18社が加盟していて、協議会は丸森町と災害協定を結んでいる。

3月11日の夕方には丸森町役場に足を運んだ。だが、情報が集まってくないので、翌日からは率先して、主立った場所の落石の片付けなどをしていった。協議会として、道路のパトロールも行った。18社で割り振りしてあり、簡単な場所は2~3日で復旧したが、場所によっては応急復旧ができずに、バリケードで通行止めにした。橋の段差による通行止めも結構あった。

とにかく電話が通じず、連絡のしようがないので足を運ばなくてはならなかった。12日には宮城県建設業協会の仙南支部おおがわらに行き、打ち合わせや連絡調整をした。宮城県の大河原土木事務所にも出向いた。当社は丸森町役場から歩いて5分程度の距離だ。毎

## 混乱

当時はラジオとろうそくしかなかった。津波がきたのはラジオでわかっていたが、実感がなかった。1週間ほどして沿岸部を回ってみると、道路沿いに建っていた建物がまるっきりなくなっていて驚いた。

そのうちに宮城県の大河原土木事務所から、「重機と人をどれだけ応援に出せるか調査してほしい」という依頼が、協会の仙南支部を通じてきた。連絡のしようがないので、私が会員企業を全て回った。各社が出せる重機と人の数を聞いて、「県から応援要請がくるはずだから、(重機や人)残しておいて

ほしい」と頼んでおいた。だが、結局は何の要請もなかった。宮城県全体の(応援に行ける重機や人の)実態などを計算し、仙南支部には要請がなかったのかもしれない。

会員企業からは、「まだ、(重機や人)押さえておかなければならないのか」と聞かれた。当時は混乱した状況だったので、仕方がないという気もするが、仙南支部への要請はないとわかった時点で、「(重機や人の確保を)解除してよい」という話があってもよかつたのではないだろうか。

町内すべての住戸の除染までやるのは、丸森町だけだが、すべて人力での体力勝負になる。民家の庭にはいろいろなものがある。建物や木もあるのでひたすら人力で対応せざるを得ない。

春日部組(丸森町) **春日部 泰昭氏**

白石市内で地震に遭い、すぐに丸森町の会社に戻った。大きな道路を選んで帰ったが、導水管が破れ、道路はひびが入り、橋の段差もあった。何とか車で走れる状況だった。

311 2:46

春日部組社長。18歳で橋本店(仙台市)に入り、1977年に春日部組に戻り、翌年に父の跡を継いで社長に。亡くなった父の四十九日がちょうど宮城県沖地震だったという。宮城県沖地震では、丸森町でもブロック塀が倒れるなどの被害があった。

# 除染作業

宮城県内で放射性物質の除染作業の対象となっているのは、丸森、<sup>かくた</sup>角田、白石、大河原など8市町村だ。丸森地区では、震災の翌年までに小・中学校、保育所などの公共施設の除染を終わらせ、民地の除染を行っている。建物から20メートルの範囲は、放射線量が毎時0.23マイクロシーベルト以下になるよう除染作業を行う。

震災から数カ月後に中学校のグラウンドに大学の先生がきて除染試験を行ったが、そのお手伝いも当社がした。グラウンドの土を2~3センチ削ってミキサーで洗い、放射線量がどれくらい下がるかを試験した際に、土を削るなどの作業を担当した。除染試験を経て、小・中学校や保育園など、子供たちがいる公共施設で除染作業が行われた。

町内すべての住戸の除染までやるのは、(宮城県内では)丸森町だけだが、すべて人力での体力勝負になる。民家の庭にはいろいろなものがある。建物や木もあるので(機械を使うことができず)、ひたすら人力で対応せざるを得ない。雨どいの泥を払って紙のウェス(ぞうきん)でふき取る、あるいは外の塀にブラシをかけてホコリを落とす、庭の表面の木の葉やこけ、腐葉土を集める、といった作業だ。

宮城県では、基本的に水は使わない、土は削らない方針で除染作業を行っている。各ポイントで作業



住戸の除染作業。ひたすら人力で雨どいの泥を払って紙のウェス(ぞうきん)でふき取ったり、外の塀にブラシをかけてホコリを落としたりする。

前、作業中、作業後に放射線量を測り、どれだけ下がったかを確認するが、なかなか思うようには下がらない。

労働基準監督署の指導を受け、作業員には特殊健康診断を受けさせている。現在(2013年11月時点)の除染作業の進捗率は(町全体の)20%程度で、2014年度内には終わるはずだ。ただ、思う通りに下がらないので、特に放射線量の高い場所については、もう一度除染作業を行うという話もある。

沿岸部は(復興工事が)これからだが、丸森地区では除染を除けば震災関連の仕事は終わりだ。仙南支部として、「スムーズに沿岸部に応援に行けるルートをつくるべきではないか」という話もしているが、なかなか難しい面もある。

## 将来に向けて

バブル崩壊後に建設業の仕事が少なくなり、最盛期の40%台の仕事量になってしまった。疲弊した中で今回の震災が発生し、建設業は大きな仕事を手にしたが、その後が心配だ。震災復興で各社とも、ある程度は規模を拡大していると思うが、すぐに技術者が育つわけではない。また、いずれは元のような過当競争の時代がくることは、目に見えている。(人や重機が)余ようになってきた時の対応を、今のうちに考えておかなければならない。

(インタビューは2013年11月27日)

中学校のグラウンドで行われた除染試験(2011年7月)。土を2~3センチ削ってミキサーで洗い、放射線量がどれくらい下がるかを試験した。



# 俺たちが地域を守り復興を果たす



**仙台市**  
渡邊 秀悦  
澤瀬 俊矢  
石川 祥和  
佐々木 光也

(本部、仙台建設業協会)

皆成建設 仙台市

阿部和工務店① 仙台市

阿部和工務店② 仙台市

橋本店 仙台市

巨大地震による被害で、  
仙台市内はインフラがストップして  
都市機能が麻痺。  
若林区と宮城野区は津波被害を受けた。  
東北の要所だけに  
経済も混乱したが、  
市街地は落ち着きを取り戻している。



被災者の身近にいて、  
その思いを強く感じることもある。  
国や県、市町村の予算があり、  
すべてやらなければならない  
工事ではあるが、  
優先順位を決め、  
発注して欲しい。  
生活の基本である「住」の整備を  
早く進めていただきたい。

皆成建設（仙台市） **渡邊 秀悦氏**

仙台港近くの産業道路で地震に。  
5メートルの津波情報があり、  
産業道路の高さは仙台港岸壁と同じ  
TP（東京湾平均海面）プラス3.1メートルぐらいでは  
と思い、「この道路にも津波がくる」と判断し、  
内陸側を経由して会社に戻った。

..... 5:11 2:46

皆成建設土木部長。建設業界に入って約40年。他社で経験を積み  
14年前に皆成建設へ。1978年の宮城県沖地震の際にも建設業界  
として対応したという。

若林区と若林隊を中心に行った防災訓練（2010年12月）。



仙台市内の5区それぞれに隊長会社、班長会社、班員  
会社が置かれていた。黒川郡にも1隊があり、合わせ  
て6隊が組織されていた。このうち海に面するのは若  
林区と宮城野区だ。

当社は若林区の隊長会社だったが、若林隊はすぐに  
動くことができた。建設会社が勝手に動いたわけでは  
なく、若林区の区長や建設部長が的確に指示をしてく  
れたのだろう。当時の区長は技術系の方だった。加え

て、仙台建設業協会では2010年12  
月に防災訓練を実施。若林区役所  
と若林隊が中心の防災訓練で、そ  
の反省会を震災直前の3月4日に  
行ったばかりだった。おかげで行  
政と業界の連携がうまくいった。

当初は若林区役所も個別に各社  
に出動を要請していたが、2～3日  
してからは隊長会社である当社が  
窓口となり、班長、班員を集めて  
打ち合わせを行うことになった。  
仙台建設業協会を通じて青葉区や  
太白区の会員企業にも応援してもらった。

## 隊長会社

仙台市若林区役所から当社に要請があり、  
震災直後から管内の道路陥没への対応を行っ  
た。社員を3班に分け、3月11日は午後10時  
半まで道路パトロールを行い、陥没個所にカ  
ラーコーンを設置するなど、通行車両に注意  
を喚起した。

翌朝、若林区役所に呼ばれ、「重機を集めてくれ。  
道路啓開を頼みたい」と言われた。だが、電話もつ  
ながら、協力会社に連絡がつかない。やむを得ず  
リース会社に直接出向き、「ここにこれだけの機  
械を入れてくれ」と頼み、当社の土木の社員に重機オ  
ペレーターをさせることにした。

啓開作業の現場では、自衛隊、警察、消防が待機  
していた。津波の到達点までは入っていったが、そ  
の先はがれきで前に進めない状況だった。辺りには、  
地元消防団のポンプ車や大型の生コン車などが横転  
し、貨物コンテナも散乱していた。泥や砂もたい積  
していた。

震災直後は、当社を含む4社で道路啓開にあたっ  
た。いずれも仙台建設業協会の若林区の会員企業だ。  
海につながる幹線道路が2本あり、そこから手を付  
け枝葉となる道路を啓開していった。14日からは事  
態が落ち着いてきたのか、約20社が入ってきた。

仙台建設業協会には災害応急措置協力会があり、



震災翌日の仙台市若林区の津波による  
被災状況（2011年3月12日）。

## 突貫対応

震災に伴うがれきの一次置場を、2011年5月の連休前に完成させる必要があった。若林区の隊長会社として班員を集め、各社の状況を聞きながら、「とにかく協力してくれ」と呼びかけた。

若林区のがれき一次置場を設置したのは、井土地区と荒浜地区だ。約200メートル×約500メートルの一次置場を2カ所整備しなければならない。2社と協力して3月29日から整備を始め、4月20日過ぎには完成させた。ダンプを集めるのも、建機オペレーターを集めるのも大変だった。千葉からも大型ダンプや重機を持ってきて、何とか対応した。7割方の機械は当社で集めたはずだ。

一次置場ができないと、がれきを搬出できないので、突貫での対応となった。この仕事だけでなく、道路の陥没対応などをやりながらだ。4月いっぱい寝食を忘れて対応した。

## 広報

仙台建設業協会にも広報委員会があるが、今回の津波対応でも自衛隊のように専属でカメラを回すことはなかった。我々が自衛隊や消防と一緒に活動していることが、一般市民に知られていない。広報を強化しないと、建設工事は無駄だと言われかねない。「コンクリートから人へ」などと言われたが、土木構造物がなければ人命を守れない。「地域建設業者は町医者だ」と言うが、まったくその通りだ。

2013年は台風が多かったが、冠水した道路の排水や陥没対応、交通規制、倒木や土砂の撤去は地元建設会社がやっている。寒くなれば除融雪にも対応する。労務や機械を持ち、地域の道路事情に精通していて、発注者からの電話1本で対応できるからだ。もちろん仕事でやっているのだが、マスコミにも我々の活動や奮闘を理解してもらえるようにしていかなければならない。

## 入札不調

現在、気になる問題点は工事入札の不調・不落が多いことだ。単価が合わない部分もあるが、入札条件として施工実績などを求めると、参加できる企業が少なくなる。特別に難しい工事でなければ、柔軟に対応していただきたい。不調・不落が続けば、工事の完成も遅れることになる。

被災者の身近にいて、その思いを強く感じることもある。国や県、市町村の予算がそれぞれあり、すべてやらなければならない工事ではあるが、労務や資材の不足を考えれば優先順位を決め、発注して欲しい。生活の基本である衣食住の「住」の整備を早く進めていただきたい。被災者が仮設住宅から早く抜け出し、復興住宅や戸建て住宅に移ってもらえればよいと思う。そうした施策を忠実に実行し、無事故で早く完成させるのが、我々地元建設会社の使命だ。

## 将来に向けて

地元経済への貢献だけでなく、地元建設業者がいなければ緊急事態が発生した時にみんなが困る。廃業や倒産で仙台建設業協会の会員も相当数減ってきている。これ以上、減らないよう、復旧・復興事業が終わってからも仕事を確保できるよう、国や県、市町村には対応をお願いしたいし、いざという時に十分に体力があり、対応できる業界でありたい。(インタビューは2013年11月7日)



仙台市若林区での啓開作業(2011年3月)。

皆成建設の渡邊秀悦土木部長の実家は石巻市にある。兄は津波から漁船を守るために沖に船を出したが、連絡が取れず、翌週15日に無事だとわかった。高齢の両親も石巻市内の避難所を転々としていて、当初は連絡がとれなかったという。

渡邊部長には、「もし私が建設業界にいないければ、両親を仙台市内に連れてくることもできた」という思いもある。当時は仙台市内も電気が点かず、快適ではなかったが、避難所暮らしよりはよかったはずだ。だが、山のようながれきを目の当たりにして、「(緊急車両が通れるよう)道路を啓開し、人命救助を優先しなければならないという使命感が勝っていた」という。

社内でも、他の部署では「休んで家族の安否を確認

してこい」ということがあったが、土木の社員は不休で啓開作業にあたらなければならなかった。とにかく重機に乗ってもらい啓開作業にあたった。若い社員に「赤ちゃんのミルクがないので店に並びたい」と言われたこともあったが、仕事を優先してもらったという。「申し訳ない」という思いを持ちながら、自らも対応にあたった。土木の社員は10人いるが、「本当に頭が下がる思いだった」と渡邊部長は振り返る。

道路啓開が終わったのは3月19日。すぐにお彼岸だったので全体で休んだことはあったが、5月の連休までは休みなしだった。

# 土木の社員は不休で



希望日に作業員を配置できず、顧客に迷惑をかけてしまうこともあった。

材料も入ってこなかったし、燃料もなかった。

移動手段は車だ。

作業員が「燃料がなくて行けない」ということもあった。

被災者もいて、すぐには動いてくれなかった。

阿部和工務店①(仙台市) 澤瀬 俊矢氏

地震発生時には  
仙台市内で講習会に出ていた。  
かつて施工を担当した8階建てマンションが  
近くにあったので、  
すぐに顔を出してオーナーに会い、  
問題がないことを確認してから会社へ。

阿部和工務店工務部部長。1991年入社。公共建築の経験もあるが、民間建築では主にマンションや商業施設、銀行などの現場管理を担当してきた。

## 担当現場

地震後に会社に戻ると、ほぼ全員が外に集まっていた。社内の対応は内勤社員が行うことになり、私はすぐに担当する現場に向かった。車で30分ほどの場所にある遠見塚小学校の新築工場の現場だ。大渋滞の中、「乗せていてくれないか」と声を掛けられたが、私

は監理技術者の立場で現場が心配だった。遠方だったのでガソリンも心細かった。後ろ髪を引かれながらも断り、現場に到着したのは夕方6時ころだ。

既に全員が帰宅し、現場事務所の中は書類が散乱して荒れ放題だった。片付けもできず、真っ暗な事務所ではしばらくは放心状態だった。一度自宅に戻ると、2人の子供の行方がわからなかった。その日は、

## 民間点検

3月14日から全社員に集合がかけられ、割り振りを決めて民間建物の(被災状況)調査に入った。全体で1,000件はあった。ほとんどが自社施工の物件だが、お客さんから「見てほしい」と引き合いがあった物件も100~200件程度あったはずだ。社内で優先順位を付けて2~3人編成で調査した。私は遠方の白石市、丸森町などを担当した。

私が調査した中に、施工の不具合で問題のある建物はなかった。ただ、大きな地震で冷蔵庫が窓際まで吹っ飛び、内側の複層ガラスを突き破っているのは見た。

## 復興住宅

現在は、次の工場の準備に入っている。宮城県が発注する災害復興住宅だ。亘理町の浜街道地区にあり、造成工事が行われている。当社として初めての災害復興住宅だ。私は現場代理人を務める。4階建ての建物で、49戸が入る予定だ。

施工にあたり、少しでも早く完成し、引き渡してあげたいという思いはあるのだが、災害復興住宅も一気に発注されている。資機材や作業員の取り合いが懸念される。いかにうまく施工計画を立案するかが課題だ。造成工事は2014年3月末が完成予定だが、早く終われば私も早く現場に乗り込みたい。

津波被害のあった荒浜(仙台市若林区)の乗馬クラブに行っていた。心配したが別の場所に避難していて、会えたのは翌日昼過ぎだった。

3月12日から現場の片付けなどを行った。小学校の建物は基礎工事中で、埋め戻しが3分の2は終わっていたので、特に問題はなかった。2人ほど作業員がきてくれたが、「今日はいいから」と帰し、1人で現場の養生や仮囲いの点検・整備を行った。

頼まれて、避難所となっている体育館の点検も行った。建て替える直前だったため、外壁のモルタル壁がかなり崩落していた。既に危険箇所には立ち入り禁止の表示があり、割れたガラスも段ボールで養生されていた。体育館の中は避難者でびっしりだった。

調査をすると、「すぐに直してほしい」という顧客と、「そんなに損傷はないので、直すのは後からでいい」という顧客がいたが、復旧の優先順位を付けるのが難しかった。希望日に作業員を配置できず、顧客に迷惑をかけてしまうこともあった。材料も入ってこなかったし、燃料もなかった。移動手段は車だ。我々は何とか燃料を確保できたが、作業員が「燃料がなくて行けない」ということもあった。作業員の中にも被災者がいて、「家族のこともあるので」と、すぐには動いてくれなかった。

会社として急いで対応しなければならなかったのは、住宅の瓦屋根の補修だ。養生だけでも早くしてほしいと言われたが、当時はブルーシートもなかった。

## 将来に向けて

発注者の事業計画が出され、我々は実質的な実行者として仕事をする立場だ。担い手として重要な役割にあると思うので、被災者の不安を解消するためにも、よいものを早く提供できるよう、官民が協力していかなければならない。

(インタビューは2013年11月28日)



避難所となっていたので、  
 たくさんの人がいたが、  
 天井が落下するなど  
 危ないところもあった。  
 地震によるダメージはかなりあった。  
 当時は、点検をして  
 「近づかない方がいい」と伝えるの  
 が優先だった。  
 その場で直してあげることもできず、  
 歯がゆさを感じた。

阿部和工務店②(仙台市) 石川 祥和氏

JR本塩釜駅(塩釜市)近くの現場事務所で  
 打ち合わせ中だった。  
 その日は足場上での作業があり、  
 地震がきた瞬間に  
 「ヘルメットもかぶらず現場に向かって走り出していた」。

阿部和工務店工事部所長。1998年入社。入社してすぐは公共工事が多かったが、最近は民間工事を多く担当している。

## 学校調査

塩釜市の現場は銀行の支店の新築工事だった。鉄骨造の建物で、鉄骨の組み立てや基礎へのコンクリートの打設が終わり、3月11日は外壁工事に着手しようとしていた。高い足場に作業員が上がっていた。

現場に駆けつけると、足場の上で作業員が動けないままでいた。私は現場代理人の立場だった。「いいから降りてこい」と避難させ、その日の作業を中止にした。建物にも大きな被害はなかったため、仙台市内の自宅に戻った。津波で道路があちこちで通行止めになっていたため、かなり遠回りをした。

12日朝も現場に行き、足場が倒れていないか、異

## 民間点検

「OB施主」(過去に施工した建物の施主)に電話で状況を確認したところ、「被害はあるが、今のところは大丈夫だ」ということだったので、富谷町の点検に回ることができた。

当社では、2006年に災害対応顧客リストを作成。「OB施主」をリストアップし、震度4以上の地震が発生した場合に「訪問した方がよい」「電話連絡でよい」という具合にランク付けし、地図

## 一気の発注

現場代理人ではなかったが、仙台市内の4件の小学校の震災復旧工事にもかかわった。ただ、仙台市からすべての小学校の復旧工事が一気に発注されたため、工期はあってもないようなものだった。足場をかけるにも資材がないし、人もいない。(コンクリートのひび割れに)補修の注入工事をする技能者には、

「別の小学校の復旧工事をやっているので行けない」と言われた。作業員を集めるのに苦労した。

仙台市発注の市民センターの復旧工事も2件やった。状況がある程度落ち着いてからの発注だったが、工期はそれなりにタイトだった。うち1件は形状やデザインが変わった建物で、補強方法がなかなか決まらなかった。

常がないかを確認してから、仙台市内にある会社に車で戻った。駐車場に入ろうとすると、富谷町の小学校の点検に向かおうとする班に出会った。「人手が足りないから、一緒にきてくれ」と言われ、同行して点検作業を手伝った。

それから数日間は富谷町に行き、何班かに分かれて学校関係の調査をした。小中学校の校舎や体育館などだが、10校以上はあったと思う。建物の中に入り目視で点検をした。体育館は避難所となっていたので、たくさんの人がいたが、天井が落下するなど危ないところもあった。校舎屋上の一部のコンクリートが落下するなど、地震によるダメージはかなりあった。当時は、点検をして「近づかない方がいい」と伝えるのが優先だった。その場で直してあげることもできず、歯がゆさを感じた。

上で位置を確認して担当者も決めていた。だから対応が早かった。

民間建物の点検では、鉄骨造で外壁がALC(軽量気泡コンクリート)の建物は、被害が大きかった気がする。私が点検した中で、最も被害が大きかった建物もALCだった。

## 将来に向けて

現在、震災時に担当していた銀行の北仙台支店(仙台市)の工事を担当している。鉄骨造3階建てで、鉄骨を建て終わったところだ。これから土間などのコンクリートの打設に入るが、やはり資機材が不足している。

今の仕事を引き継ぎ、私は仙台市発注の落合災害復興住宅の現場に行かなければならない。7階建ての建物で112戸が入る。施工は阿部和工務店・仙建工業JVで、現場代理人を務める。

(インタビューは2013年11月28日)



澤瀬氏が震災時に担当していた  
遠見塚小学校の新築現場  
(2011年3月11日)。

阿部和工務店の石塚友博建築部部長は、「社員が休みをなげうって、よくやってくれた」と震災当時を振り返る。顧客からそれぞれの社員に連絡があったのかもしれないが、翌日から多くの社員が出勤してくれた。未曾有の災害に「何とかしなくてはならないと思ったのだろう」と話す。

電話帳でも「あ」から掲載が早いからか、阿部和工務店には外部からいろいろな電話がかかってきた。だが、当時は燃料も資材も不足していて、「OB施主」や顧客が関連する建物にしか対応できなかった。石塚部長は、「申し訳ないけれど、すぐには対応できないと言わざるを得なかった」と悔やむ。お年寄りなど困った人もいたはずだ。「建設業界として、うまくチームワークで対応できればよかった」と考えている。

# 社員が休みを なげうって

富谷町で行った小中学校の被災調査。  
何班かに分かれ、  
10校以上の校舎や体育館などを調査した。



石川氏が震災時に担当していた  
釜市の銀行の支店。写真は竣工後。



壊れた瓦屋根の補修の要請が相次いだ  
が、養生をするブルーシートもなかった。



元通りの姿を取り戻した仙台駅 (2012年10月)。



青葉城から見た仙台市内 (2012年10月)。



仙台駅につながる青葉通り (2012年10月)。

## 復興した仙台市内

震災直後、仙台市内は電気、水道、ガスなどのインフラがストップして都市機能が麻痺した。仙台市内を走る地下鉄南北線も一部が不通となり、通勤の足に大きな影響を与えた。復興して市内は元の姿を取り戻したが、東日本大震災は、都市の脆弱性を露呈させた。



社員がよく動いてくれたと思う。  
 でなければ、  
 この期間に  
 これだけの要請に  
 応えることはできなかった。  
 土木、建築を合わせ  
 約30人の社員が  
 会社に泊まり込んで対応した。  
 ほとんどの要請に応えた。

橋本店(仙台市) **佐々木 光也氏**

地震発生時は12階建ての社内でした。  
 災害対策本部を設けようと、  
 仙台市宮城野区高砂にある  
 災害サポートセンターに向かったが、  
 渋滞に阻まれ、本社1階ロビーに本部を設置。  
 エレベーターも止まり、  
 11～12階の事務所には上がれなかった。

橋本店取締役土木部長。1977年入社。東日本大震災時には土木部長として、土木関係の要請をさばいた。

3月 2:46

# 道路啓開

震災当日から要請が入った。宮城県建設業協会から徒歩で連絡がきて、「打ち合わせのため宮城県庁に向かってほしい」と言われた。当社から宮城県庁、国土交通省東北地方整備局、仙台市役所は徒歩圏にある。翌朝からどうしたらいいかを確認し、夜のうちに対応に動いた。

午後7時に「夢メッセ(みやぎ産業交流センター)に発電機を運んでほしい」と要請が入った。そこには多くの人が避難していた。すぐに手配したが、運転手が戻ってきた。国道45号も産業道路も放置車両で近づくことができないという。情報が全く入ってなかったが、あらためて事態の重大さを感じ取った。

## 震災直後からの橋本店の主な対応(土木)

3月 11日	14:46	東日本大震災発生
	16:00	本社ビル1階に災害対策本部設置
	18:00	国道4号線48号線点検、異常なしの連絡あり
12日	19:00	宮建協 夢メッセに発電機運搬要請(被災放置車両のため近づけず)
	3:00	宮建協 早朝に市内から多賀城までの45号線と白石から角田までの113号線の点検要請あり
	7:40	東北地整 仙台市内3カ所の歩道確保、車道の段差解消
13日	11:00	宮城県 船岡工業用水の漏水調査要請
	15:00	宮城県 仙台土木事務所から発電機の要請
	16:00	東北地整 南三陸町への45号線のがれき撤去の要請
	18:00	東北地整 国道48号線の作並崖崩れの復旧要請
	19:00	宮建協 宮城県東部土木事務所の孤立救出要請(ボート運搬)
	9:00	東北地整 45号線東松島、石巻の3カ所の迂回路誘導規制要請
14日	11:00	宮城県 大型土のうの運搬要請
	宮城県	三陸自動車道の道路補修要請
	16:00	宮城県 気仙沼土木事務所から発電機要請
	7:45	宮建協 宮城県より測量機器の貸出し要請
	12:00	宮建協 砂押川へ大型土のう300袋運搬要請
15日	15:30	宮建協 岩沼市へブルーシート900枚の運搬要請
	東北地整	東北技術事務所から発電機要請
	16:00	東北地整 阿武隈川左岸のクラック補修要請
	東北地整	阿武隈川右岸の堤防復旧要請
	18:00	東北地整 阿武隈川左岸の亀裂シート養生要請(緊急)
	9:00	宮城県 仙塩浄化センターの放流渠復旧要請
10:00	宮城県	七北田川河口堤防の応急復旧要請
	13:00	都市再生 あすと長町地内の整地要請(仮設住宅用地)

日付が変わり、12日午前3時に宮城県庁から「土のうを用意してほしい」と連絡がきた。道路に架かる橋を点検し、段差があれば土のうを置き、車が通れるようにしてほしいという要請だ。夜明けとともに社員を向かわせた。

午前7時40分には東北地方整備局から要請があり、仙台市内3カ所で崩れた歩道の応急復旧を行った。午前11時には県庁から「船岡(柴田郡柴田町)で工業用水が漏水している」と連絡があり、調査に向かった。午後3時には宮城県の仙台土木事務所から「発電機を用意できないか」と言われ用意した。

印象に残っているのは、南三陸町に向かう道路の啓開だ。南三陸町は孤立して大きな被害があり、心配だった。12日午後4時に東北地方整備局に呼ばれ、南三陸町に向かう国道45号のがれき撤去を要請された。一刻も早く、自衛隊や消防が入っていけるようにし、孤立した住民を救出しなければならない。翌朝から啓開作業に取りかかった。重機を積んで登米市の方から進んでいくと、道の駅津山(もくもくランド、登米市津山町)のところで、自衛隊や消防ががれきに阻まれ、待機していた。

16日	16:00	東北地整 鳴瀬川左岸の調査補修要請
	17日	11:00 東北地整 南三陸町へトイレ20台運搬要請
	18日	11:00 東北地整 軽油運搬の要請(災害対策車の燃料) 19日 南三陸町、陸前高田市、大槌町 (以後山田町、釜石市、女川町、多賀城市、七ヶ浜町へも)
19日	13:00	宮城県 貞山堀井戸地区の堤防復旧の要請
	17:30	東北地整 阿武隈大堰のゲート上のボート撤去要請
20日	17:15	東北地整 仙台空港周辺に量水標設置要請
	9:00	宮建協 南三陸町へ普通土のう1,000袋運搬
22日	11:00	東北電力 西仙台変電所内の道路復旧要請
	13:00	宮建協 亶理町がれき撤去の要請
23日	10:00	仙台市 中野雨水ポンプ場の水管要請
	25日	10:00 大崎市 鹿島台病院外構及び下水の破損調査依頼
26日	15:00	宮城県 高砂ふ頭コンテナ移動要請
	28日	13:00 下水事業団 山元浄化センターのがれき土砂撤去要請
29日	10:00	山元町 がれき撤去要請
	11:00	東北防衛局 松島基地災害復旧
30日	9:00	宮建協 松島町へ普通土のう2,000袋要請
	11:00	宮城県 東松島市東名地区の復旧工事要請
4月 1日	14:00	仙建協 仙台市宮城野区のがれき撤去要請
	5日	10:00 仙台市 青葉城坂囲い他要請
7日	10:00	宮城県 亶理町へ大型土のう800袋要請
	10日	10:00 仙建協 仙台市若林区で捜索がれき撤去要請
15:00	宮城県 松森工業用水管の復旧要請	

注)表中の組織名は、要請を受けた相手。宮建協は宮城県建設業協会。東北地整は東北地方整備局、仙建協は仙台建設業協会、都市再生は都市再生機構。ただし、宮城県からの要請が宮城県建設業協会を通じてきた場合には、宮建協となっている。



国道45号、南三陸町の道路啓開(2011年3月)。

# 集中

12～14日には要請が集中した。宮城県建設業協会を通じての要請もあれば、当社に直接きた要請もある。災害対策本部長を佐々木宏明社長が務め、土木と建築に分かれて対応し、(各部署に)要請が流れていく形にしたので、一斉にきた要請に応えることができた。

これだけの要請に対し、社員がよく動いてくれたと思う。でなければ、この期間にこれだけの要請に応えることはできなかった。土木、建築を合わせ約30人の社員が会社に泊まり込んで対応した。阿武隈川大堰(亶理郡亶理町)が開閉できるよう、ゲートに引っかかったボートを取り除くなど、ほとんどの要請に応えた。

# 課題

仙台湾南部海岸の堤防工事もしているが、堤防に使う土砂が思うように入らない。一斉に工事が始まったが、山の生産能力が限られている。他工区も同様だ。ダンプ、トラックの確保でも苦労している。建築工事では型枠工、鉄筋工、左官工が不足している。特に左官工は以前から若年者がほとんどおらず、職人の数が少なかった。

他県からも作業員としてきてもらっていたため、仙台市宮城野区の高砂サポートセンターに復興宿舎を整備した。気仙沼市内も泊まるところがないため、岩手県一関市室根町に復興宿舎を構えた。約20分で気仙沼市に行ける。

エネルギー問題が懸念される中、仙台市郊外の芋沢に保有していた土地にはメガソーラーを設置した。2013年2月から稼働していて、450世帯分の電気を賄うことができる。

# 仙台港

一番の課題は生コンの骨材不足であった。仙台港の防波堤が90～100センチ沈下し、沖防波堤、北防波堤、南防波堤の復旧工事を当社で受注した。仙台港の場合、海底地盤が下がったためにケーソン全体が沈んでいた。

生コンで均等にケーソンをかさ上げし、防波堤を元の高さに戻す工事だった。ミキサー船を使ったのだが、砂と骨材を供給してもらえず、砂は北海道の十勝港から、骨材は女川港から船で運んだ。これまで経験したことがないが、資材から集めなければならなかった。

2012年1月に着工し、2013年9月に完成したが、東北地方整備局からは「何としても工期を守ってほしい」と言われていた。低気圧がくれば高波を被る恐れがある。仙台港を最優先で守る必要があった。



コンクリートミキサー船による仙台港の防波堤復旧工事。

# 将来に向けて

私が見る限り、被災地の復興への道のりはまだ遠い。かなりの復興予算が付いているものの、資機材、労務費が高騰し、工期的にも時間がかかっている。先の見通しが立たないまま次々と工事が発注されているが、どう打開できるのか。今の戦力で臨まざるを得ないが難しさはある。被災地以外から、どれだけ応援が期待できるかも不安だ。東京オリンピック関連の工事が本格的に始まるまでに、どこまで復興が進むのか。自分の力ではどうしようもない状況である。

(インタビューは2013年11月7日)

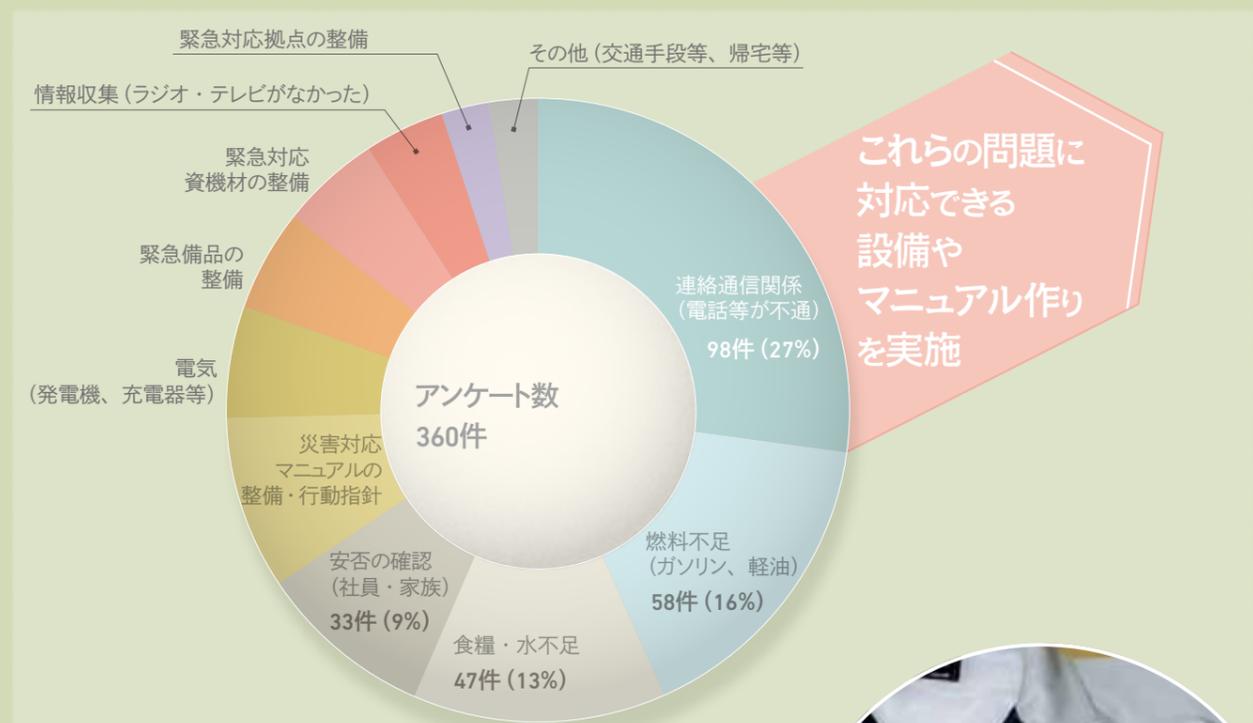
**橋** 本店では4カ所の現場が被災し、連絡がとれない職員が数名おり、不安を抱えたままでの対応となったという。車を運転中に背後から津波に襲われ、仙台東部道路に駆け上がり、助かった社員もいた。女川町の現場から石巻市に向かっていた2人の社員は、車ごと津波に飲み込まれたが、たまたまドアが開いたので泳いで助かった。

佐々木本部長は、「いずれも連絡が取れるまでに3日ほどを要した。本当に心配だった」と話す。同社の佐藤俊博会長は宮城県建設業協会の会長を務めている。社

員の安否確認ができないまま、会長会社として、さまざまな要請に応えなければならない辛さがあったという。

後日、震災時にどういう問題があったか、社内アンケートを実施したところ、連絡が取れない問題点が指摘された。今回の経験をもとに震災対応マニュアルを作製し、すぐに連絡体制が取れるよう社員に携帯させることにした。また、本社や各営業所にはMCA無線(デジタル業務用無線)も配備した。

# 安否確認ができぬまま 会長会社として



これらの問題に対応できる設備やマニュアル作りを実施

震災時の問題と対応(社内アンケート)

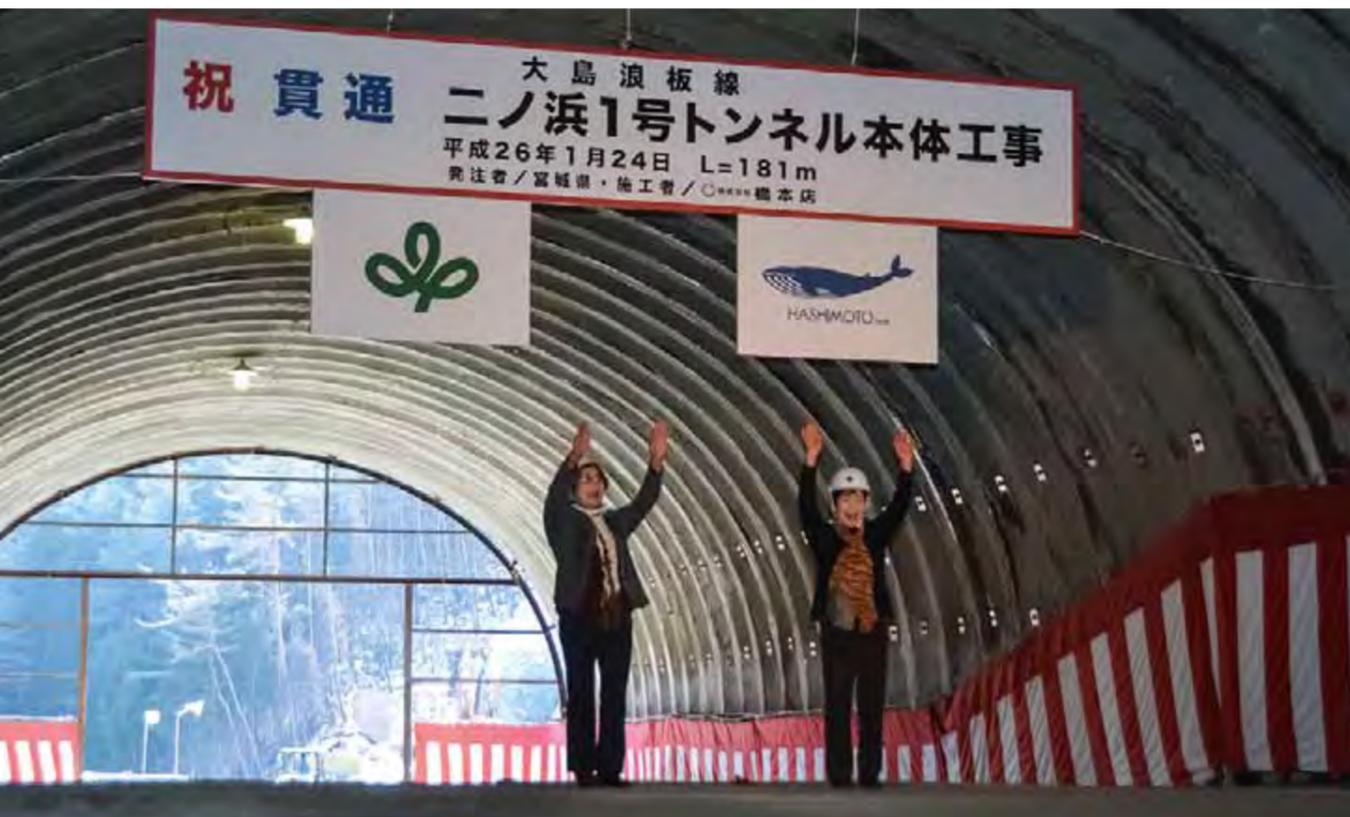


■作製したポケットサイズの震災対応マニュアル

# 現場技術者の努力で復興は着実に進んでいる

地域建設業の現場技術者は、震災直後から人命救助や住民支援、道路啓開、復旧工事などに奔走してきた。その努力で被災地の復興は着実に進んでいるが、彼らの闘いは今も、そしてこれからも続く。

志津川トンネルの完成を願う児童の寄せ書き（2013年1月）。



二ノ浜1号トンネルの貫通を喜ぶ地域住民（2014年2月）。



すっかりきれいに片付いたがれきの焼却処理施設（2014年1月）。



役割を終えた焼却処理プラント（2014年1月）。

## 膨大ながれきの焼却処理が完了

宮城県内で最も多くの災害廃棄物が発生した石巻ブロックの焼却処理が完了。県内に設置された26基の廃棄物用仮設焼却炉が、すべて役割を終えた。



焼却処理プラントの火納め式（2014年1月）。

# 活気を取り戻した漁港

津波被害を受けた沿岸部の多くが水産都市だった。漁業を<sup>なりわい</sup>生業としている人が多く、漁港の活気を取り戻すことが地域の復興につながる。



南三陸町の志津川漁港で作業をする漁業関係者(2013年12月)。



漁船の浮かぶ志津川漁港(2013年12月)。



## 巨理町復興事業着工式

巨理町での復興事業の着工式。災害公営住宅や集会所などが整備される(2013年3月)。



巨理町での復興事業の着工式(2013年3月)。



活気を取り戻した女川漁港(2013年9月)。撮影 水本圭亮



# 被災者の 住まいを確保

被災者が待ち望んでいる災害公営住宅の整備や集団移転のための造成工事も進んでいる。

塩釜市で災害公営住宅が完成し、市長らから鍵を受け取る子どもたち(2014年2月)



88  
仙台湾南部海岸(岩沼市)で行われた植樹祭には、子どもたちや一般市民も多く参加した(2013年6月)。

## 被災地の未来へ

ふるさとの復興は、  
被災地の共通の願いだ。  
子どもたちの未来のためにも、  
今ここできちんと  
復興を果たす責任がある。



津波で浸水した石巻市役所(2013年12月)。今こそみんながひとつになる時だ。

# 特別座談会

## 東日本大震災の 発生からこれまで

多くの悩みを抱えた被災地の現実

被災地では、

復旧・復興に向け膨大な工事が進められ、

資機材や作業員の確保に加え

資材価格・人件費の高騰といった課題も顕在化。

様々な悩みを抱えながら、

地域建設業の使命として復旧・復興に取り組む、

宮城県建設業協会の常置委員会の委員長4人と

専務理事2人が集まり、

特別座談会を開いた。



## 被災地の復旧・復興の現状

### 全て失ったという『心の痛み』

武山 石巻は、震災の津波被害が県内で最も大きな地域だ。復旧事業が進み、かつての生活のすべてだったがれきと言われるものが目に見えて片付き、一見、元に戻ったような風景に出会うが、あくまで片付いたというだけであって、よい側面もあるが何もなく、全て失ったという『心の痛み』や『心の疲れ』が現れてきている。これは地域の住民が抱える一番の問題であると感じる。だからこそ復興に携わる建設会社への要望が大変多い。復旧・復興に向けて土木工事を近隣で行っていると、「お年寄りのゲートボール場が流失してしまい、楽しみがなくなってしまった。どうか地域貢献として、工事のついでに造ってほしい」と言われる。また、「学校の校庭が壊れてしまい、教育委員会に頼んだが資材が入手できず手がつけられない。宮城県建設業協会に加入している会社であるなら簡単にできるだろうから、直してもらいたい…」などと、要望なのか注文なのかかわからないものが舞い込む。実際にはそのどちらでもなく、何かに誰かにすがってくる。それもよくわかる。我々、建設会社としても、土木工事というものがあるからこそ、『虚しさや悔しさ、寂しさ』を紛らわしている部分も多々あると思う。一番は職務に対する責任であるとはわかっているが。

では、我々、建設会社は何にすぎなのか？何を頼りにするのか？やはり宮城県建設業協会であるのは、会員の皆さんも同じではないか。震災前はいろいろな課題や問題があってもあまり感じなかったことであるが、1企業の力では何もできないのは明白であるし、協会の方々に甘えて、いろいろな資料の作成や要望活動の準備などをしてもらい、改善点も見だせてありがたい。

村田 地震被害だけならば、大崎エリアのある宮城県北部の方が大きかった。ただ、現

状では建物の復旧・復興はほとんど終わっている。一部で学校の改築工事が残っているが、2013年度内には終わるはずだ。ライフラインを含めた河川・道路も、国直轄の(河川の)築堤工事をはじめ盛んに行われているが、2013年度には形ができる。

地震被害で民間施設もかなりの打撃を受けた。気になるのは中心市街地だ。公費(の補助)が出たので解体は進んだが、新たな建設はこれからだ。歯抜けとなり、見るも無惨な姿になった。空き地と駐車場が増えた。

沿岸部の被災者の受け入れなども念頭にあるのだろうが、大崎エリアは災害公営住宅の発注戸数が仙台市や石巻市に比べて少ない。大崎市だけで170戸、近隣の美里町や涌谷町を入れても300戸までなかった。



石巻市の被災状況(2011年3月)。

千葉 復旧・復興事業は、それなりのスピードで進んでいる。工場や企業もフル生産、フル稼働の状況だ。生コンが不足気味だと言われるが、震災前の倍以上の量を各工場が生産・供給している。加えて、不足部分をコンクリート二次製品化しているのも、ものすごい量で事業が進んでいる。

津波堆積土も海岸堤防に再利用され、沿岸部は異常なスピード感を持ってきれいになっている。ただ、津波被害を受けた(海岸線から)3キロ前後は地盤沈下もあり、町をどう再生するかが決まっていない。草だらけなので、事情を知らない人は(復旧・復興

「(海岸線から)3キロ前後は地盤沈下もあり、町をどう再生するかが決まっていない。草だらけなので、事情を知らない人は遅れているという印象を持つだろう。非常に残念だ。」

が)遅れているという印象を持つだろう。非常に残念だ。

阪神淡路大震災で被害を受けた地域は30キロだったが、今回は500キロだ。ひどいところは海岸線から5キロも内陸まで津波被害を受けた。加えて、石巻市や気仙沼市は1メートル近くも地盤沈下してしまった。ライフラインもやり直しになってしまう。

### 組織として道路啓開やがれき処理を完了

菅野 震災発生後、被災地に行くための道路復旧にはアスファルト合材が必要だった。出荷体制が重要になるので、アスファルト合材協会が窓口となり、製造機械の点検・修理が終わった工場の情報を随時発信した。宮城県内には17カ所のアスファルト合材工場があるが、すべてが稼働を再開できたのは6月30日だ。その間の応急措置は常温合材や再生砕石で対応した。震災後は道路網の回復が一番に必要なが、緊急処理、応急処理、仮復旧、本復旧へと相当なスピード感を持って対応できた。

宮城県内でも地域によって差はあるが、災害に関する道路工事はピークを過ぎた。これからは防災・減災、さらには維持修繕、新しいまちづくりにかかわる工事が中心になる。



■千葉(専務理事)熱海建設(株)

千葉 嘉春 専務理事 熱海建設(株):仙台市  
 武山 徳藏 土木・農業土木委員長 (株)武山興業:石巻市  
 村田 秀彦 建築委員長 (株)村田工務所:大崎市  
 菅野 悟 舗装委員長 日建工業(株):仙台市  
 佐藤 元一 労務安全・環境委員長 (株)佐元工務店:仙台市  
 伊藤 博英 専務理事 宮城県建設業協会



津波被害を受けた女川町でも、会員企業が自主的に道路啓開作業を開始。道路を通行できる状況にした(2011年3月)。

佐藤 当社は建築主体なので、最初に動いたのは仮設住宅への対応だった。宮城県の場合、仮設住宅への対応はプレハブ協会が主体だった。早く整備を進めるために建築会社としても協力したかったが、なかなかうまくいかなかった。

また、当社は、半分くらい民間の仕事もしてきた。当社の地元は、古い町並みなので高齢者も多く、自宅や会社のカギがかからないなど、みんなが困っている状況だった。会社の前に直してくれという人の行列ができたが、対応には限界がある。職人の数に



仙台市若林区での道路啓開(2011年4月)。

も限りがあり、当初の1カ月間は思うように対処できなかった。原因は10年ほどにおよぶ建設業の疲弊と業者数の減少、職人の減少だ。復興はまだ終わっていないが、今も尾を引いている。

伊藤 震災直後は道路啓開から入り、がれきの片付けなどについても、組織を挙げて対応できた。構造物の解体も仙台市内は仙台建設業協会が受けた。そうした事業がほぼ完了し、がれき処理も予定通りに終わるはずだ。そういう部分で復興は進んでいると思う。一方、まちづくりは本来、時間がかかる。被災したのは沿岸部一帯の500キロにもおよび、それぞれの地域でまちづくりを行うため、地盤沈下なども影響して計画策定に時間がかかっている。

(復興事業を)進めるにつれて、会員企業からいろいろな問題が出てくる。宮城県建設業協会は組織だから、会員企業の声を集め、関係機関に要望して改善にいたっている経緯がある。個々の企業で訴えても改善されない。一つ改善すればまた新たな問題が出てくる。その都度、会員の意見を聞きながら、どのように訴えればわかってもらえるかを考えるのが協会の役割だ。安心して施工できる環境を作ることが重要だと思っている。

## 2 復興事業のスピード

### 優先順位を決めて 真の意味の復興を

武山 震災以前は工事量の減少により、建設業者全体が疲弊し、宮城県建設業協会の会員数も半減した。これ以上、会員数が減っていたら今回の震災の復旧工事でもできなかったであろうと言える。この震災直後は、少しでもあるにしても期間的に建設会社の底力が脚光を浴びたが、近い将来、3~4年もしたら、仕事量は減り元の疲弊した企業だけになるのは火を見るよりも明らかである。さらなる事業を加速させるのは、将来の仕事量がなくなるということだ。

震災後、地域住民が生活するための工事に関しては、協会加入の会員企業が真剣に取り組み、現在にいたっている。確かに被災者向けの住宅等の整備や建築は遅れているが、道路、河川の社会資本は整備が済んで、生活するのに不便はないのではないか。

被災者の住宅については、被災者が高齢もしくは年齢的に自助努力で住居の再建ができず、「仮設から出るに出られない」「家は建てられない。仮設住宅にいたい」など、人それぞれの思いはあるはずだ。優先順位はそこか



復旧・復興事業を進めるため、被災地ではたくさんのトラックが行き交っている(2013年11月)。

“職人不足に拍車がかかるだろう。  
技術の継承をしないと  
建設産業が衰退する。  
ただ、「(復興を)やれ、やれ」と  
言うばかりではなく、  
政策的にやっつけていかないと、  
本当の意味の復興にはならない。”

らではないか。

村田 スピードアップしなければならないのは災害公営住宅だ。建築の場合、これから職人不足に拍車がかかるだろう。技術者も含め、技術の継承をしないと建設産業が衰退する。ただ、「(復興を)やれ、やれ」と言うばかりではなく、政策的に(技術の継承も含め)やっつけていかないと、本当の意味の復興にはならない。

(集団移転などの)場所も決まらないまま現在にいたっているが、沿岸部での建築工事の増大は目に見えている。いかに全県を挙げて対応していけるのが重要な課題だ。それでも(職人や技術者が)不足した時には、また、宮城県建設業協会の力を発揮してもらえればと思う。

佐藤 でっちぼうこう 昔の大工は丁稚奉公だった。飯付きで小遣いを与えながら技術を覚えてもらい、技能者を育てた。宮城県下で職業訓練学校の大工コースは3校あったが、今は1校だけになった。それだけ魅力のある職業でなくなった。聞くところによると、米国やカナダでは(訓練を卒業した若者が)ホームビルダーに就職してから、国や自治体が金を出して一定期間研修を行い、一人前に育てているという。国や自治体が援助する体制が整っている。設計者がいても、技能者がいなければ建設業は成り立たない。震災を契機に、技能者



■村田(建築委員長)(株)村田工務所

「若い社員がいない。長い間、採用を控えてきたからだが、今いる人間で能力以上の仕事をやっている」。そう説明したかったが、あの場所に立つと言葉には出せなかった。」

を育てる仕組みを検討してほしい。

菅野 先日、道路パトロールで志津川(南三陸町)に行ったら、地元の人に「いつになったら元の町に戻るのか。役所も建設業者もさっぱりだ」と言われた。私は「東西南北を見てください。いたるところで復旧工事をやっているでしょう。完成に向けて、みんな一生懸命にやっているのだよ」と説明した。だが、地元の人には「仮設住宅に入った人はイライラして(団地の造成や災害住宅の完成を)待っている」と言う。一生懸命にやっているが、(多くの建物が全壊した)あの現場に立つとわからない。地元の人たちに理解して、待ってもらうことも必要かもしれない。

「建設業も、震災前は会社を縮小してきた。若い社員がいない。長い間、採用を控えてきたからだが、今いる人間で能力以上の仕事をやっている」。そう説明したかったが、あの場所に立つと言葉には出せなかった。



■菅野(舗装委員長)日建工業(株)

### 3 膨大な工事量と単価高騰

#### 集中的に発注されるためにすべてが不足

千葉 公共事業費は最盛期の3分の1まで下がり、働く人の賃金も10年間で4割も下がった。働く人が不足気味だと言われるが、事業量(の減少)に合わせた体制だった。麻生政権の時に補正予算を含め8兆円ちょっとあった公共事業費が、(政権交代で)3年はくぼんだ。3年なので、まだ力が残っている。みんながフル稼働すれば、何とか乗り切れると思う。

だが、(賃金のベースとなる)設計労務単価が下がったことで別の問題が発生している。厚生労働省のデータによれば、建設業に従事している29歳以下の若い人の比率は、12年前は22～23%だったが被災時には11%だった。また、型枠工業会のアンケートでは、2011年から2012年にかけて職人が16.5%減ったという。震災で忙しいというのに、団塊の世代がリタイアしたからではないか。若い人が少ないので、そうなる。将来の国土強靱化やインフラの維持管理を考えた場合、担い手である職人や若い人が建設業に従事できる仕組みが必要だ。被災地だけでなく、全体的な視点でとらえて労務単価を決めてもらわないと、また同じことになる。

今は急がしいので、労務費が上がっている。日本建設業連合会東北支部が、鉄筋工と型枠工の実勢価格を調べたところ、(設計労務単価の)1.8～1.9倍を出さないときでももらえないという。これが建築工事の入札不調にもつながっている。実態と設計価格のかい離をどう打開すればいいのか。少なくとも被災3県については、(工事費を補正する)復興係数を反映するよう考えてほしい。もらった工事費用にプラスアルファで仕事をしたのでは、企業としてもたない。

菅野 同時期に集中的に工事が発注されるため、作業員、ガードマン、資機材、運搬車両も不足して値段が上がる。設計価格になか



河川堤防の復旧工事での捨て石投入作業(2013年11月)。

なか反映されず、もっと迅速に単価を改定する方法を望んでいる。

佐藤 がれき撤去にしても、田んぼの上にあるものは国土交通省で、田んぼにささったり中に入ったものは農林水産省ということになる。復興事

業全体を見渡して、優先順位を決められないのではないか。各省庁・自治体が一体となった復旧・復興事業の推進が望まれる。

村田 被災した建物を解体するのは環境省、住宅を復旧するのは国土交通省、商店や町並みを復旧するのは経済産業省ということで、一体的に計画できていないようだ。問題は、解体しても杭や地下埋設物が残っていることだ。環境省にすれば、危険なところだけ取り除けばよいという考え方だ。

被災地の中心市街地に住宅を建てる際、1階を店舗にしてほしいといった要望が出る。現在は、沿岸部などで認められているようだが、国土交通省(の所管)は住宅だけということで、当初は認められなかった。各省庁の思惑により整備が進んでしまい、いまさら戻れない状況もある。

集中的に工事が発注されるため、資材も建機も不足気味だ。



4 技術者不足と待遇問題



■ 武山 (土木・農業土木委員長) (株)武山興業

「技術者の自転車操業」

伊藤 現場の皆さんからよく聞く問題は、発注者側の技術者が足りず、他県から応援にきてもらっているが、3カ月でいなくなってしまうことだ。施工会社の技術者は代えることができず、同じ人が担当するのだが、積み重ねてきたことがやり直しになる。技術者が不足する中で、大変な思いをしているのに、余計な時間がかかってしまう。

また、仕事を受けてもなかなか工事に入れない状況があり、会社の経費に悪影響を与えてしまう。そうした点でも技術者に負担がかかっている。協会ですべてを訴えていくべきことだと思っている。

菅野 技術者には「がんばれ、がんばれ」と言うしかない。休む暇がない。この仕事が終わればすぐ次の仕事だ。余裕のあるところは、

「建設業界、建設企業に人が集まらないのは、お金=給与が追いついてこないからだ。震災後に建設会社は従前の2.5倍の仕事をしている。社員数の変動がないのだから、それだけ社員に負担を強いている。」

現場が終わって次の現場に行くまでの間に1カ月くらい休ませてやることもできたが、今は「まだ、終わらないのか」という状況だ。「技術者の自転車操業」と呼んでいる。

武山 宮城県建設業協会に労務単価や人件費の引き上げを要望していただいているが、発注者には「生活できる水準の単価で発注してほしい」ということだ。本来、企業側から要望することではなく、発注者が考慮してくれるべき事案であり、建設業界、建設企業に人が集まらないのは、お金=給与が追いついてこないからだ。

各社の経営状況を示す「経営規模等評価結果総合評定値通知書」(通称：経審)を見ればわかるが、震災後に建設会社は従前の2.5倍の仕事をしている。社員数の変動がないのだから、それだけ社員に負担を強いている。そういった点をよくみてほしいと思う。たまたま「建設会社は何しているの」みたいなことを言われるが、社長が全ての現場に張り付いているわけではないし、そのための現場ごとの現場代理人や監理技術者などであるので、深い理解を示してもらえよう一般の人へのアピールも必要だ。



技術者も作業員も休む暇がないという。

第3回 復興加速化会議



太田国土交通大臣も出席し、仙台市内で開かれた復興加速化会議(2014年2月)。様々な施工確保対策が話し合われた。

5 入札不調と価格変動

適正な経費が出ないと仕事ができず

千葉 復旧・復興事業でかつてない建設市場がある中で、市場にマッチングしないものがあり、入札不調が出てくる。資機材や人件費の需給バランスが崩れていることもあるし、為替相場の変動で油の値段も上がっている。電気料金が上がれば、鉄筋の値段も上がるだろうし、そういうものが重なって価格が高騰する。

仙台地区の生コンを例にすると、震災後に価格が倍になった。工事を受注してから、(物価変動に合わせて)スライドで(資材費用を)変更するスキームはあるが、倍の値段になったものをカバーできるかというと、まったくできない。5~10%の値上がりなら追いついていけるだろうが、仙台の生コンは200%の値上がりなので追いつかない。設計単価が上が

るまでに1年かかる。1年前の単価に上がったなと思うと、さらに実勢価格が20%上がってしまう。営利企業だから適正な経費が出ないと仕事ができず、入札不調になってしまう。

ただ、国や自治体も検討会議を立ち上げ、(価格高騰の)問題点を見だし、対策を講じてくれているので、入札不調・不落がある程度減っているのも現実だ。

武山 100本の工事が発注されて、4~5割が入札不調になったなら、建設業が工事を選んで不落にしていることになるだろうが、国の公共工事の契約率は約92%で、宮城県はさらに高いという。工事の10~20本が入札不調になったからといって、(故意に)不落にしていることにはならない。精一杯仕事をしているのに、「入札不調だ、不落だ」と問題にされても腑に落ちない。

## 地域建設業は「新聞記者」でもあれ

武山 反省点として、我々は一般へのPRをしてこなかった。震災を経験した時にも、建設現場の写真しか撮影せず、(建設業の活動を含めた)周辺の状況を撮影していない。社員に勉強させて撮影しておけば、記録誌にも使えるしPRにもなる。

当社で求人をかけたら4人の高校生が面接にきた。大郷町の学校からは、「石巻市で震災の仕事をした」という女の子もきた。震災で動いた建設業のことを、学校は見てくれている。ただ、初任給も安いし生活もままた

らないので、そのあたりは発注者や国も考えてほしい、マスコミも訴えてもらいたい。

これから建設業界としてやらなければならないのは、「震災の記録」ではなく、「震災になったらどうすべきか」という本を出すことかもしれない。震災でどういう問題があったか、どうしたらいいかを出し合う。石巻市立大川小学校では、(子供を亡くした)父兄が訴訟を起こしたりしているが、建設業者であれば、あそこにいたらどうすべきだったかがわかったはずだ。宮城県建設業協会の佐藤博俊会長がよく、「地域建設業は町医者だ」と言うが、「新聞記者」でもあるべきだ。記者のように、自分たちで(地域を)よく見て、(いざという場合には)こうすべきだ、こうすれば問題を解決できると、業界として

発信する。これから起きる震災に対してもプラスになる。公共工事を行う会社は、地域の生命・財産を守ることが第一の使命であり、きちんと情報を発信すべきだ。だからこそ、「きちんと必要な費用を出してくれ」という話にもなる。

菅野 震災では自衛隊、消防、警察が華々しく取り上げられた。地域建設業は、その陰で地道に粘り強く活動していたわけだが、少なくともその時点で地域の人たちは、建設業、特に地域の実情に詳しい地域建設業の必要性を認識してくれたことと思う。ただ、これからは仕事が減っていくわけで、最も打撃を受けるのは地域建設業者だ。「持続的な経営環境の向上」と言われるが、求めるのは公共工事の入札契約制度の見直し、特に総合評価制度の地元業者の評価や、経営支援の窓口を作って、一生懸命にまじめにやろうとする業者への支援があったりしてもいい。

佐藤 今回の震災での道路啓開やがれき撤去は、大手建設業にはできなかった。地域のみなさんも、地域に根ざした建設業が必要だと認識したと思

う。体力的に大手と同じようにはできないが、我々にできることはまだまだある。復興に関しても、一括して大手にやらせるのではなく、地元でできるものは地域建設業に発注するような体制をつくっておけば、地域に金が落ちる。地域に金が落ちなければ復興はできない。税金を東京に持って行かれるだけだ。被災地の自治体は、地域建設業は必要だと認識し、価値を認めて予算付けをしてほしい。がれきの山の中で、重機を持っているのは地域建設業だけだ。

役割を明確にし、特定の災害が発生した場合、2~3カ月後には地元にならざるの仕事が割り振られるような形で決めてもらえば、それなりに準備ができる。地元の製材業や木材屋さんまでお金が回ることになる。

村田 一般の方には、「地域建設業は地場産業だ」と説明してもらっている。内陸の例だが、11月になると除雪作業の打ち合わせが行われるが、作業を受託できる建設業者が年々減っている。オペレーターの問題もあるが、除雪機械の問題もある。例えば大崎市は東西に80キロの距離があり、鳴子・鬼首<sup>なるこ おにこうべ</sup>地域と鹿島台地域では降雪量が全く違う。「同じ単価で除雪をやってくれ」というのが自治体の考え方が、年間2~3回しか出勤しないのに、4~5カ月間もリースで除雪機械を抱えていられない。除雪以外にも地元の建設工事をやらせてもらっているのに、何とか我慢してきたが、耐えられなくなってきた。

自治体とも協議を行っているが、担当課レベルでは理解してもらえても、(対応のための)予算化は難しそう。地元企業としては、こうしたところで貢献したい思いはあるし、細かいところまで地域に密着していることをPRしていきたい。それが地域建設業の役割だと思っている。

現在、復興計画が検討されているが、「ここまでは公共で行い、ここから先は民間で行う」という話が出てくると思う。建設業のノウハウを活用し、再開発や区画整理、再生まちづくりと一緒にやっていくことも地域建設業の役割だと思う。社員には常日ごろから、「建設業は、ものづくりの一番よい仕事だ」と話をしている。一般の方にも理解してもらい、持続できる地域建設業を目指し、復興・再生に向け

我々にできることはまだまだある。

復興に関しても、  
地元でできるものは  
地域建設業に発注するような  
体制をつくっておけば、  
地域に金が落ちる。  
地域に金が落ちなければ  
復興はできない。”

てがんばっていくしかない。

## 地域に必要不可欠な産業という観点で

千葉 地域建設業は、今回の災害に対応することができた。石巻地区などで遺体の仮埋葬を行ったのも建設業だ。除雪への対応も含め必要な産業であることは間違いないし、いかに継続して残すかという観点で考えていただきたい。市場にまかせ、「安ければよかろう」というのがこれまでの制度だった。それが原因で、今後のインフラ整備を担う若い技術者、職人が減ってきている。別の視点で考えてもらわないと将来、インフラの維持管理を行うことができない。

宮城県建設業協会の佐藤会長もよく言うが、自分の家を建てるのに一番値段の安い人に頼むだろうか。「あまりにも安いと危ない」と考えるはずだ。国民の財産である公共施設も同じだ。競争性や公平性を保ちながら、事業を執行するのは難しいのだから、競争の中に(技術者や職人の)人件費まで入れてしまうのは間違いだ。直してもならないと未来がなくなる。

佐藤 地元の会社は地域に貢献するととも



■佐藤(労務安全・環境委員長)  
(株)佐元工務店



世界の復興モデル都市を目指して、  
復旧・復興工事が進む(2013年12月)。



「震災時に駆けつけるという意味では準公務員的な役割だ。待遇面でもそれなりのものがあるべきで、賃金体系も見直してもらわなければならない。魅力ある産業にしていく必要がある。」

に、地域に支えられている。互いに支え、支えられる立場だが、中でも建設業は雇用の受け皿としての役割が大きい。発想を変えて、行政が支援すべきだ。地域に必要な不可欠な産業であるという観点で、建設産業政策をやってもらった時代に入った。少子高齢化が進めば限界集落が増えて、その地域がなくなってしまう。周辺都市がなくなれば仙台市だってマイナスだ。(雇用の受け皿を)育てるという観点から、建設業に対する政策を考えてもらいたい。

伊藤 地域建設業は必要な産業であり、地域にまんべんなくないと、いざという時に対応できない。意外と一般に知られていないのが、(当協会と国・自治体等が)災害協定を結んでいることだ。例えば、震度5弱以上の地震が起きた場合、夜中だろうと休みだろうと出動して(道路や河川等を)2時間以内に点検し、被害状況などを報告している。きちんと世間一般に地域建設業の常日ごろの活動を正しく知ってもらうことも大事だ。

東日本大震災を機に、各県の建設業協会を(災害対策基本法に基づく)指定地方公共機関に指定する傾向がある。宮城県でも近いうちに当協会を指定する動きになっていて、優先電話なども貸与されるようになるだろう。震災時に駆けつける



■伊藤(専務理事)宮城県建設業協会

という意味では、準公務員的な役割だ。待遇面でもそれなりのものがあるべきで、(労務単価などの)賃金体系も見直してもらわなければならない。働く若者にとって魅力ある産業にしていく必要がある。

公共工事品確法の改正案が示されているが、きちんと仕事をすれば利益が残せる仕組みをつくるという。仕事をした分だけ、会社が安定して経営できるようにしなければならない。宮城県からも「復興後の建設業の支援策を今から考えましょう」と提案されているので、(地域建設業が)存続できる仕組みを作っていきたい。

武山 雇用の受け皿になり、たくさんの人を雇うことはできる。がれき処理を手伝ってもらった人たちもいるが、「建設業だから、明日から仕事ができる」と思われるのは大きな間違いだ。雇っても2~3カ月間は勉強させなければならない。その点を考えてもらわないと困る。助成金を付けてもらうなどしてそういう人たちを雇用し、必要な教育を行った上で働いてもらえばよい。スコップを持って現場に出ればよいという話ではない。

新入社員教育だけではだめだ。ある程度勉強させてから現場に出さなければならない。建機オペレーターもそうだ。被災者は特例措置で、経験がなくてもオペレーター免許を取ることができる。オペレーターになれば賃金も高いが、危なくてしょうがない。勉強させる期間が必要だ。

佐藤 解体工事でも考えられない事故が起きている。プロとしての意識がない。安全に対する考え方を研修しないと事故が増え、ますます危険な職業だと思われる。魅力がなくなってしまう。



雪が降っても駆けつけるのが建設業だ。



被災地の未来のためにも、津波へのソフト対策が必要だ。石巻市の旧河北町で(2013年11月)。撮影 水本圭亮

7 津波学習へ映像を残せ

協会津波映像を制作して学校へ

千葉 「釜石の奇跡」と言われるが、釜石市では子どもたちがでんでん(ばらばら)に津波から逃げた。スマトラの津波の映像を子どもたちに見せていたという。「地震がきたら逃げなくてはならない」と思っていたので、みんなが逃げた。一方、大人は今までの経験が脳裏にあって逃げなかった。津波がくるまで、地震で被災した自宅を整理していた人も多かったという。

現在、津波のハード対策は行っているが、ソフト対策がおろそかになってはいないだろうか。東海、東南海地震がこれからくると言われる中で、国として教育に取り入れている様子も見えない。地震や津波にどう対応するのか、ソフト対策にも取り組むべきだ。

武山 宮城県建設業協会津波の映像を制作し、宮城県内のすべての学校に配れば、大きな効果が期待できる。

伊藤 2015年3月に国連防災世界会議が仙台市で開かれるので、関連行事において「当

協会として映像を制作してはどうか」という話はしていた。

武山 (世界会議の関連行事で制作する映像の)ミニ版でもいいから、教訓ということで宮城県建設業協会が学校に教材として配れば大きなインパクトがある。あまり長くなくてもよい。全国に広がると思う。山田町(岩手県)でも子どもたちが津波から逃げた。陸前高田市(同)でもスマトラの映像を子どもたちに見せていたのに、隣町の唐桑町(宮城県)や気仙沼市(同)では見せていなかった。

千葉 これだけの津波が起きて日本全体がびっくりした。事実として、(津波防災教育を受けていて)助かった人が多くいたし、テレビでも何度も取り上げている。なぜ全国的にやらないのか。

武山 だから当協会が映像を制作し、全国に配信してやればよい。石巻市の教育委員長にその話をしたことがある。私の恩師なのだが、「よい話だ。寄付してくれればよい。映像を見せる、見せないは学校の判断だ」と言われた。国土交通省に監修してもらい、宮城県建設業協会の名前で出すこともあり得る。ぜひ、実現を考えてほしい。

(座談会は2013年12月13日)

# 資料編

宮城県の子算額と公共土木施設の復旧状況

災害に強いまちづくり宮城モデルの構築の推進

災害廃棄物の処理状況

災害公営住宅の整備状況

復興の完了は、

仕事がなくなることを意味する。

地域の一員として、一日も早い復興を目指しながらも、

その先、地域建設業としてどう存続していくのか。

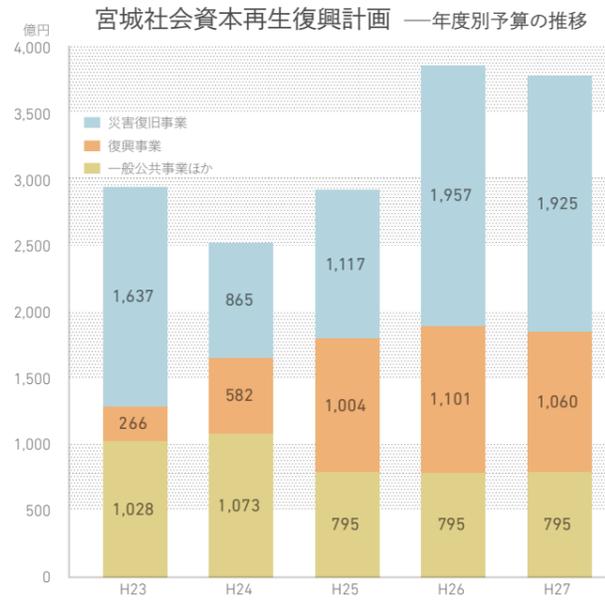
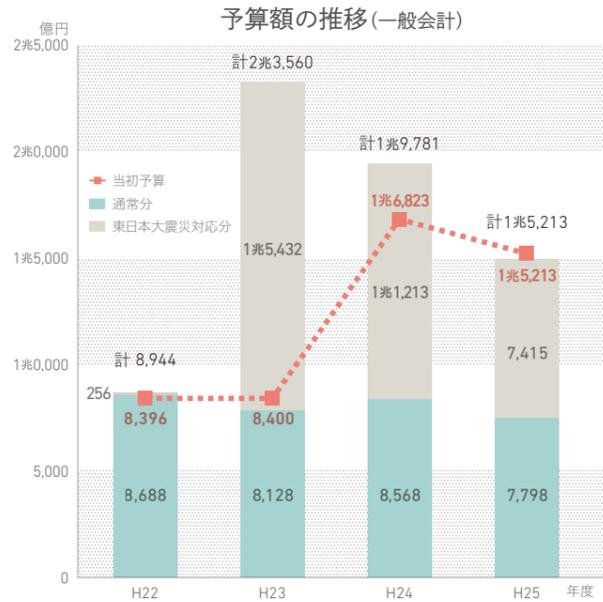
これまで通りに地域を守っていけるのか。

多くの悩みを抱えた被災地の現実が、

そこにある。



**宮** 城県の公共土木施設全体の災害復旧事業の着手率(平成25年12月末現在)は、個所ベースで約91%、金額ベースで約37%となった。内陸部では、個所ベースで約99%、金額ベースで約89%の着手率だ。施設の復旧状況としては、全体811カ所のうち777カ所が完成(完成率は約96%)。一方、沿岸部では、個所ベースで約86%、金額ベースで約35%の着手率となった。施設の復旧状況としては、全体1,541カ所のうち707カ所が完成(完成率は約46%)となった。



※平成22～23年度は年間予算額、平成24年度は2月補正後予算額、平成25年度は当初予算額

※「復興事業」には東日本大震災復興交付金で実施する事業(まちづくり関連道路、多重防御、防災緑地、災害公営住宅)、社会資本整備総合交付金(復旧・復興)や道路改築事業(復興)で実施する事業(復興道路、橋梁耐震化、港湾防潮堤、河川改修)およびその他事業(市町村の災害公営住宅整備など)が含まれる。

公共土木施設の復旧状況

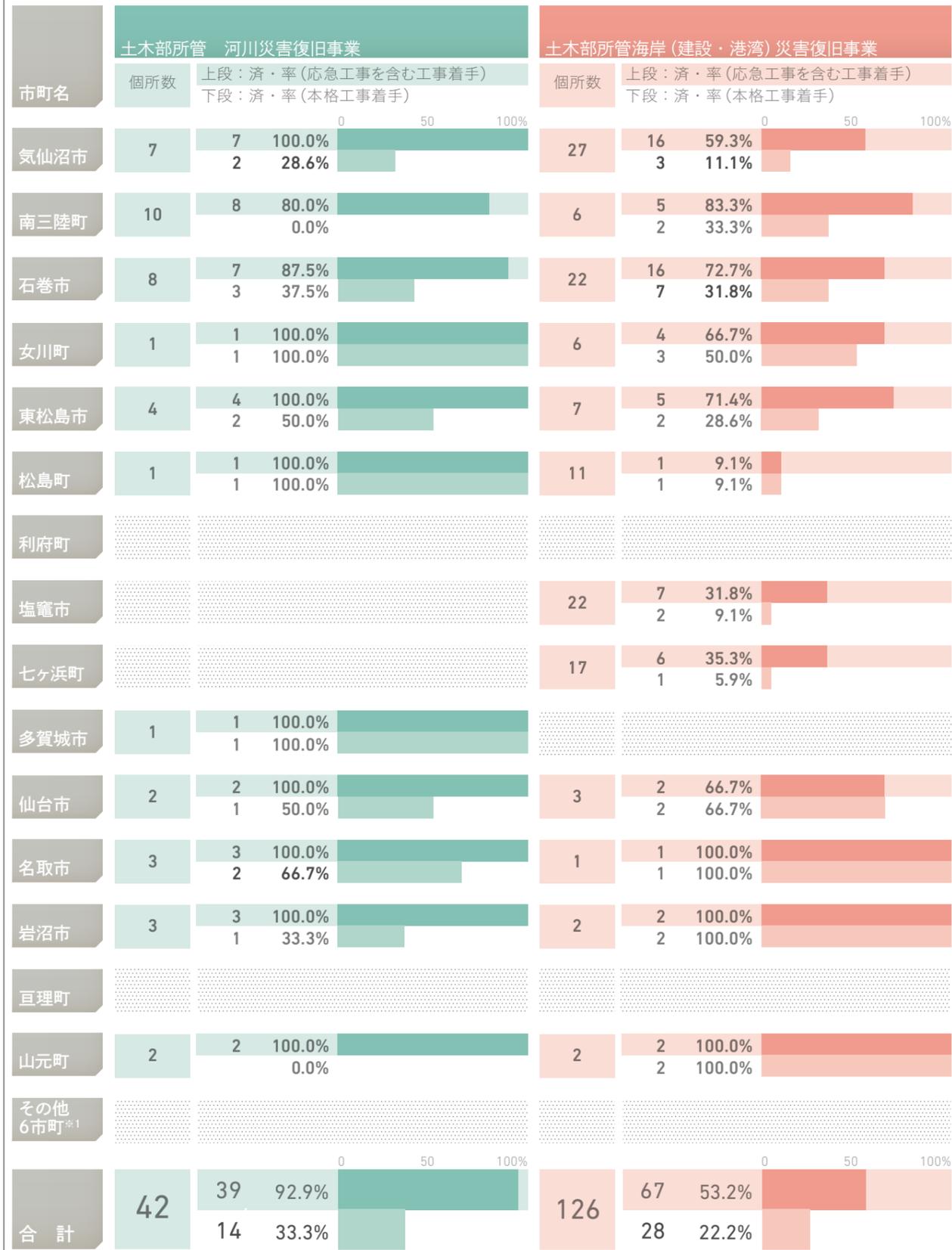
(平成25年12月末現在)

項目	概要	被災個所数	進捗率 (着手 完成)	着手率	完成率
公共土木施設	道路、橋梁	H23～27年度 約5,376億円 2,352カ所	個所ベース	約91%	約63%
	河川、海岸 砂防、下水道 港湾、公園		金額ベース	約37%	約14%
沿岸部			個所ベース	約86%	約46%
			金額ベース	約35%	約12%
内陸部			個所ベース	約99%	約96%
			金額ベース	約89%	約83%

項目	概要	被災個所数	進捗率 (着手 完成)	着手率	完成率
道路・橋梁施設	復旧工事 期間 復旧費 被災個所数	H23～27年度 約842億円 道路 1,437カ所 橋梁 128カ所	個所ベース	約95%	約70%
			金額ベース	約52%	約32%
河川施設	復旧工事 期間 復旧費 被災個所数	H23～27年度 約2,420億円 278カ所	個所ベース	約93%	約67%
			金額ベース	約19%	約2%
海岸保全施設	復旧工事 期間 復旧費 被災個所数	H23～27年度 約797億円 74施設	個所ベース	約80%	約1%
			金額ベース	約34%	約0.2%
急傾斜地 砂防・地滑 施設	復旧工事 期間 復旧費 被災個所数	H23～24年度 約8億円 9施設	個所ベース	約89%	約89%
			金額ベース	約99%	約98%
下水道施設	復旧工事 期間 復旧費 被災個所数	H23～25年度 約402億円 121カ所	個所ベース	約100%	約99%
			金額ベース	約92%	約91%
港湾施設	復旧工事 期間 復旧費 被災個所数	H23～27年度 約884億円 292カ所	個所ベース	約65%	約22%
			金額ベース	約40%	約9%

津波対策

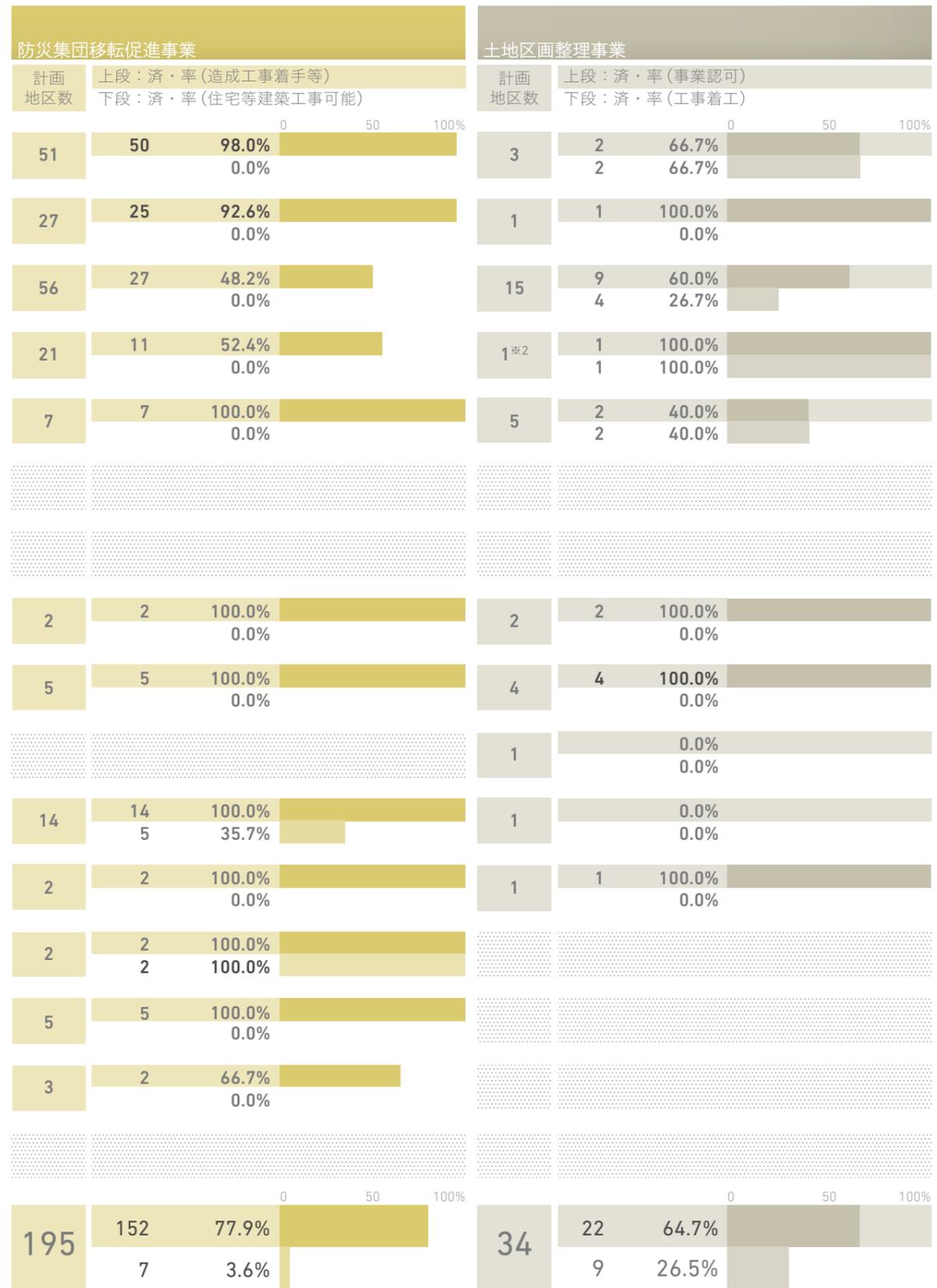
(平成25年12月末現在)



※1 登米市、栗原市、大崎市、大郷町、涌谷町、美里町  
 ● 津波復興拠点整備事業は、8市町12地区が計画され、7地区が事業認可済みとなっており、うち5地区が工事着手となっている。

復興まちづくり事業

(平成25年12月末現在)



事業計画の国交省大臣同意は全地区で得ている

※2 女川町は事業認可を4カ所取得しているが、1地区として計上している。

### 災害廃棄物の処理状況について

現状(沿岸市町村のみ)

環境省公表資料を元に作成(平成25年11月30日現在)

県	市町村	県への事務委託	災害廃棄物等 A+B			災害廃棄物 A				津波堆積物 B		
			推計量(千トン)	処理・処分状況		推計量(千トン)	仮置場設置数(カ所)	処理・処分状況		推計量(千トン)	処理・処分状況	
				処理量(千トン)	処理率(%)			処理量(千トン)	処理率(%)		処理量(千トン)	処理率(%)
宮城県	仙台市	×	2,644	2,497	94.4%	1,344	3	1,312	97.6%	1,300	1,185	91.1%
	名取処理区		964	964	100%	741	0	741	100%	222	222	100%
	県処理分		771	771	100%	549	0	549	100%	222	222	100%
	名取市処理分	○	193	193	100%	193	0	193	100%	0	-	-
	岩沼処理区		627	627	100%	464	0	464	100%	162	162	100%
	県処理分		623	623	100%	461	0	461	100%	162	162	100%
	岩沼市処理分	○	4	4	100%	4	0	4	100%	0	-	-
	亘理処理区		856	856	100%	476	1	476	100%	380	380	100%
	県処理分		840	840	100%	459	1	459	100%	380	380	100%
	亘理町処理分	○	17	17	100%	17	0	17	100%	0	-	-
	山元処理区		1,692	1,606	94.9%	788	4	743	94.3%	904	863	95.5%
	県処理分		1,692	1,606	94.9%	788	1	743	94.3%	904	863	95.5%
	山元町処理分	○	0	0	-	0	3	0	-	0	-	-
	宮城東部ブロック		1,074	1,051	97.8%	669	3	646	96.6%	406	405	99.8%
	県処理分		286	279	97.4%	225	1	218	97.0%	61	61	99.0%
	塩竈市処理分	○	151	151	100%	151	1	151	100%	0	-	-
	多賀城市処理分	○	305	305	100%	197	0	197	100%	108	108	100%
	七ヶ浜町処理分	○	332	316	95.1%	95	1	79	82.9%	237	237	100%
	松島町	×	64	64	100%	63	0	63	100%	2	2	100%
	利府町	×	19	19	100%	19	0	19	100%	0	-	-
	石巻ブロック		8,045	7,396	91.9%	4,847	9	4,588	94.6%	3,198	2,809	87.8%
	県処理分		3,229	2,925	90.6%	2,341	1	2,141	91.5%	888	784	88.3%
	石巻市処理分	○	1,317	1,279	97.1%	1,169	4	1,130	96.7%	149	149	100%
	東松島市処理分	○	2,972	2,675	90.0%	811	3	799	98.4%	2,161	1,876	86.8%
	女川町処理分	○	526	517	98.4%	526	1	517	98.4%	0	-	-
	気仙沼処理区		2,048	1,871	91.3%	1,087	6	1,046	96.2%	961	824	85.8%
	県処理分		1,758	1,581	89.9%	809	1	768	95.0%	949	813	85.6%
	気仙沼市処理分	○	290	290	99.9%	278	5	278	99.9%	12	12	100%
南三陸処理区		677	639	94.4%	524	6	502	96.0%	154	137	89.0%	
県処理分		614	586	95.4%	460	1	449	97.5%	154	137	89.0%	
南三陸町処理分	○	63	53	84.5%	63	5	53	84.5%	0	-	-	
宮城県計		18,711	17,590	94.0%	11,022	32	10,600	96.2%	7,689	6,990	90.9%	
県処理分		9,813	9,211	93.9%	6,092	6	5,788	95.0%	3,721	3,422	92.0%	
市町処理分		8,897	8,379	94.2%	4,930	26	4,812	97.6%	3,967	3,567	89.9%	
被災3県の合計		27,483	24,089	87.6%	16,612	91	15,147	91.2%	10,870	8,941	82.3%	

注：一次仮置き場の数 最大時186カ所

### 災害公営住宅の整備状況について

市町別整備状況

(平成25年12月31日現在)

市町名	計画戸数	事業着手戸数		工事着手戸数		工事完了戸数	
		進捗率	進捗率	進捗率	進捗率		
仙台市	3,200戸	2,786戸	87.1%	1,461戸	45.7%	12戸	0.4%
石巻市	4,000戸	1,821戸	45.5%	457戸	11.4%	149戸	3.7%
塩竈市	380戸	196戸	51.6%	71戸	18.7%	0戸	
気仙沼市	2,200戸	1,346戸	61.2%	165戸	7.5%	0戸	
名取市	752戸	50戸	6.6%	0戸		0戸	
多賀城市	532戸	482戸	90.6%	160戸	30.1%	0戸	
岩沼市	210戸	210戸	100.0%	0戸		0戸	
登米市	60戸	60戸	100.0%	55戸	91.7%	0戸	
栗原市	15戸	15戸	100.0%	15戸	100.0%	15戸	100.0%
東松島市	1,010戸	666戸	65.9%	274戸	27.1%	0戸	
大崎市	170戸	170戸	100.0%	105戸	61.8%	0戸	
亘理町	497戸	412戸	82.9%	350戸	70.4%	0戸	
山元町	487戸	413戸	84.8%	75戸	15.4%	50戸	10.3%
松島町	52戸	52戸	100.0%	0戸		0戸	
七ヶ浜町	212戸	212戸	100.0%	0戸		0戸	
利府町	25戸	25戸	100.0%	25戸	100.0%	0戸	
大郷町	3戸	3戸	100.0%	3戸	100.0%	0戸	
涌谷町	48戸	48戸	100.0%	8戸	16.7%	0戸	
美里町	40戸	40戸	100.0%	40戸	100.0%	40戸	100.0%
女川町	945戸	228戸	24.1%	200戸	21.2%	0戸	
南三陸町	770戸	324戸	42.1%	84戸	10.9%	0戸	
計	15,608戸	9,559戸		3,548戸		266戸	

計画戸数は現時点でのものであり、設計内容により変更になることがあります。

この川が多くを飲み込み、  
人々に襲いかかったのか。

一人静かに釣り糸を垂れる老人は今、  
何を思うのか。

ふるさとを取り戻し、

二度と悲劇を繰り返さないために、  
現場技術者の闘いは、これからも続く。

——北上川のほとりで 2013年11月



俺たちが地域を守り復興を果たす  
3.11 東日本大震災  
宮城県建設業協会の闘い 2

平成26(2014)年3月

発行 一般社団法人 宮城県建設業協会  
〒980-0824  
仙台市青葉区支倉町2番48号  
宮城県建設産業会館6階  
電話 022-262-2211 FAX 022-263-7059  
E-mail [jigyo@miyakenkyo.or.jp](mailto:jigyo@miyakenkyo.or.jp)  
URL <http://www.miyakenkyo.or.jp>

編集・制作 日刊建設工業新聞社

写真協力 水本圭亮

印刷 平河工業社

津波被害を受けた気仙沼市の沿岸部(撮影 水本圭亮)

